獻中壹歌

如龍介著

獄中哀歌

加藤介春

獄中哀歌

加藤介春

南北社

本間國雄書伯裝釘

早稲田大學
十二學士
著

早稲田生活

四六判約四百六十頁
裝幀嶄新極美本
定價金壹圓
小包送料八錢

三版

國民新聞評——早稲田大學十二名の學士が母校に對する熱愛の精神を以て、私學の爲めに沖天の氣燄を揚げたものである。學問に國境は無いとは三十年來平民主義的人道主義的自由思想を主張して來た早稲田のモットーであつた。而して今や名實共に我學界の覇者として盛に人材を供給しつゝある。斯くの如く歐米有數の大學と比肩して敢て遜色のない早稲田の校内、校外の生活を熱烈痛快の筆を以て描出したものが即ち本書である。評者は未だ曾つて斯くの如き壯快な著書に接したことはない。官學か私學か、これ近年學界の大問題であるが。憶ふに私學の爲めに沖天の氣燄を吐いて居る本書は、亦一面に於て正に官學私學の問題に對して大斷案を下したものである。滿天下の學生たるものは須らく三讀すべく、吾人は更に一般人士に向つて其の子弟の爲めに強いて必讀を勸める。

東京帝國大學
六學士共著

赤門生活

四六判約三百四十頁
裝幀嶄新極美本
定價金八十錢
小包送料八錢

再版

やまと新聞評――赤門出の若い六名の學士が、相會して過ぎ去つた大學時代の追懷談でもするやうな氣分で東京帝國大學内外の事情を忌憚なく赤裸々に描寫したものである。『日本最高の學府』から『戀の赤門』まで息もつがずに讀み了させる。そして讀んで行く内には東京帝國大學といふ一種の空氣がふくよかに現れて、溢るゝ許りの興趣を覺えしめる。殊に此の書の長所は六名の異つた學科出の著者等が各自の分科を擔當して臆面もなく如實に筆を行つた處にある。正しい意味に於ける赤門及び其の學生生活を知りたいと思ふ人、又は一般學生に取つては好箇の讀物である。附錄として京都、九州、東北の三大學をも加へてあるから、此等を比較して見ると更に別樣の面白味を感ずる。

片上伸先生著

生の要求と文學

四六判約五百頁
箱入新型裝幀瀟洒
定價壹圓廿二錢
小包送料十錢

忽再版

讀賣新聞評――藝術及び人生に對して、著者の如く敬虔謙讓の念を持して居る人は少ない。自己省察と新生活の創造とに精進努力する又著者の如きは眞に罕である。此の一卷の何れを讀むも、意義深き生の動搖と新しき理想の閃影とを認めざるを得ない。著者の心は戀て我等の心である。然れども先覺の著者に依りて、我等は暗きより明きに導かれ、自らの心の在所をも知らせられるのである。此の點に於て我等は感謝の念の油然たるを覺える。尙又此等の思想を表白せる著者の文章は正に一種の詩で、自由に鮮新に、自ら拓きたる境地を自ら行くの概がある。要するに此の書は近代人の内生活を明々地に語れると同時に、新文學發達の逕路を詳述したるものである。創作にして評論である。停滯せる心の勇躍を欲するもの、生の不安に目くるめける者は、必ず一本を求めよ。裝幀清洒、恰も著者に對するが如し。

メーテルリンク著
大谷繞石先生譯
土佐林義雄壽伯裝釘

智慧と運命

紙數五百餘頁
新案南北社型極優美
定價金壹圓
小包送料金八錢

最新刊

巢立せんとする無數の蜂が呻りをなして其の巢の周圍に群れる態にも似たる人生に處するは冒險ならずや。此の間に處して幸福なる人は運命に支配せられたる人か。平々坦々たる生を送れる人は運命の勢力範圍外に超越したる人か。之を歷史に覓めよ。之を現代に見よ。運命を御したる人は賢者なりしか運命に飜弄せられたる人は愚人なりしか。平凡に生きたる人は超人なりしか。過去現在未來に亙つて無限に延長擴大して廣大無邊の神秘的廣袤を有する運命は果して人智の備覗窺知を容さゞるものか。白耳義の神秘的哲人メーテルリンクは常に此の靈妙不可思議の境地を探究して玆に一大哲理を發見したり。本書は卽ち其の結晶なり。避くべからざる運命といふか。運命の名は爾かく戰慄すべきものか。之が解決を得んとするものは直ちに本書に來れ。

エレン・ケイ女史著
本間久雄先生譯
土佐林義雄壽伯裝釘

婦人と道徳

紙數約二百八十頁
新案南北社型極優美
定價金八拾錢
小包送料金八錢

最新刊

婦人問題は近時世界の最大なる社會問題である。思想界に於ける此の問題の代表者たるイプセン・ビヨルンソンは、婦人を婦人としてよも寧ろ男子と同じく一個の人間として取扱つたが爲めに、彼等の言說は婦人の道德問題に對しては要するに一個の暗示たり、理想たるに止まり、到底男女兩性關係の實際問題に大なる影響を及ぼすことが出來なかつた。然るにエレン・ケイ女史は婦人を一個の人間としてよりも寧ろ婦人そのものとして取扱ひ、堅實なる新しき婦人の新道德を說いた。久しく因襲に囚はれ來つた歐洲一般の婦人は女史に於て百年の知己を得たやうな思を以て女史を崇敬して居る。女史は一般女子の見解を廣め、其の偏見を斥け、其思想を解放し、其の生きんとする勇氣を覺醒するに努めた。女史の說く所は道德の外的形式でない、婦人の本來としての純潔なる最高道德である。我國現時の情勢に鑑み、高尙なる女子の人格修養の書として切に此の一本の購讀を薦む。

オスカー・ワイルド作
中村吉藏先生譯
小林德三郎畫伯裝飾

サロメ

紙數約百七十頁
新案南北社型極艷麗
定價金六拾五錢
小包送料金八錢

忽再版

之を評壇の鬼才小宮豐隆先生の言に聞け。曰く『靈と肉とを區別してワイルドの「力」を考へることは出來ない。靈と肉とを區別して「サロメ」の値うちを考へることは猶のこと出來ない。官能の世界を突き詰めて獸性の中に神の姿を見たものがオスカー・ワイルドである。肉即魂の戀に刹那を永遠に論じたものが王女サロメである。――靈肉一致といふことを認めることなしには、王女サロメの戀を完き貌に於て値踏みすることは出來ない。サロメの魂はサロメの凡ゆる神經の末梢にも猶ほ漲つてヨカナアンと一つのものになることに喘いでゐる。サロメの徹底したる官能主義は聽て洪水のやうな猛火のやうな偉きな熾んな心靈主義の現はれである。餓ゑたる魂の爲めに糧を求める劇しい精神的活力の象徴である』と。又重ねて本書の價値を瞰々するの要を見ず。本書を讀まずして官能主義唯美主義の文藝を口にする勿れ。

中澤臨川先生序
水谷竹紫先生作
本間國雄畫伯裝幀

熱灰

四六判約參百四十頁
箱入洋裝頗優美
定價金壹圓
小包送料八錢

再版

國民新聞評――著者の處女作である。中澤臨川氏は本書に序して著者をキーンドに比して居る。それは兎に角として「熱灰」は、この著者にして始めてものし得べきものである。換言すれば當今文壇に優に別に一特色を出した作、而してそれが處女作であるだけ、其處に著者の將來に期待するところが多い譯である。主人公の秀雄が一度相ゆるして子までなした婦人に對する心持や、其の子に對する心持は、痛ましきまで端的に暴露されてある。聞く所によれば此小說の爲めに都下の學生界には「熱灰的戀愛」といふ熟語が流行したり、又ある二三の女學校の女學生は此の作に表はれた著者の婦人觀戀愛觀に憤慨して、此の著者を禱り殺さうといふ決議をしたさうである。併し其れは別問題として近來快讀した一冊作として讀書界に推薦するに躊躇しない。

モウパッサン作
前田晁先生譯
本間國雄畫伯裝釘

誘惑

紙數約三百頁
新案南北社型極優雅
定價金八拾五錢
小包送料金八錢

女の心理を描ける『サーマンス・ライフ』男の心理を描ける『レデース・マン』と共に、處女の心理を描ける本書（原名『イイゼット』）は文豪モウパッサン隨一の傑作と稱せらる人間の誘惑、死の誘惑、生の誘惑、これらは怪しくも不可解なる家庭に於ける艷麗狂へる花の如きイイゼットの處女生活を中心としてモウパッサン獨特の筆致を以て描き盡さる。この作一度世界の文壇に問はるゝや、最高文藝の見地よりするものは之を以て萬代不易の傑作と激稱し、因襲的舊道義の見地よりするものは之を以て千古未前の不道德なる傑作なりと怒號し、是非の論囂々として時の論壇を賑やかしたりといふ。此の名作が我邦に紹介せられざるや久し。願はくば今にして我邦文藝愛好家の意見を聽くを得んか。

最新刊

自序

▲詩作を始めたのが、いつ頃からだつたかは一寸思ひ出せませんが、最も多く書いてゐたのは『早稲田詩社』自由詩社』等の仲間入をさして貰つてゐた頃、即ち明治四十年から一二年迄だと思ひます。その頃が最も深き親しみを詩に有ち、そして暫しの間でも、詩を忘れたり、詩から離れたりする事が出來ませんでした。

▲東京を去つて博多に來たのは明治四十三年の三月でした。博多は私に取つて極めて感じの好い、いつも暢々した心持を有たせる所です。私は博多の者となつた事

に對して惡感を抱いた事は未だ一度もありません。

▲然るに私は博多に來てから詩作を一切止めてしまひました。詩を書かずにはゐられないやうな緊張した氣持が段々緩んで來たのです。私は可成り永い間、詩作を馬鹿々々しい苦痛な物に考へてゐました。それは一面私が、私自身の詩作に向つて要求する所のもの――何ものなるかは明確に言へませんが――を博多の人々から、いつも絶えず且つ豊かに與へられてゐると感じてゐたからだと思ひます。私はその頃何の淋しさも、物足らなさも感じませんでした。それ程私は博多が好きでしたので、或は私が博多に惑溺し、安價な生活に滿足してゐたのかも知れません。

▲私の生活なり、氣持なりが、恰度放蕩息子の夢が覺めて本心に歸つたやうに、變りましたのは明治四十五年六月に私に一事件が生じてからの事です。私は何等心のやましさは感じませんが、事件と言つて置きます。私は茲には只事件が事件だけに、それを追懷する毎に不快せぬけれど、事件が事件だけに、それを追懷する毎に不快と憤懣とをなさけ無さとを感じます。事件の明白に解決しましたのは、その年の十月即ち大正元年十月の末でした。

▲事件の濟んだばかりの、うす暗い、そして尚おざ〳〵しさの根絶しないやうな私は、いつの間にか、私の欲する所のものを、もう單に博多の海や、川や、人々に向つてゞはなく、私自身の詩作に向つて要求せねばならぬやうになり

ました。　此の間の心機の轉變に對して、私は幾度も『何故に』と言ふ質問を發して、それを獨り眞面目に考へました。

▲そして兎に角、私は再び詩作をするやうになりました。最初の作は大正二年の『早稻田文學』新年號に載せた『蜜蜂の王』でした。

▲此の集に收めてあるのは、何れも『蜜蜂の王』以後の作で、殆んど大正二年一ケ年間の收穫です。　私は『獄中哀歌』十六篇を此の集の主とし、『赤き日』及び『女の歌』數十篇を客としました。　主も客もあの事件以後の作、即ちあの事件の爲めの私の生活や心持の變轉後の作と言ふ點に於て變りはありません。　私の此の收穫は如何に貧しいものであっても、私自身にとっては大切な過去の記念です。

▲私が此の集に、以前の作、即ち明治四十年から一二年頃迄の作を一つも入れてゐないのは、大部分散逸して蒐集する事が出來なかつた爲めでもありますけれど、一つは此の集をして成るべく純なる記念たらしめたいからでもあります。

▲散文『蜘蛛』と『慰籍』は詩だけでは何んだか物足らぬ所があるやうに思ひましたから、それを補ふ爲めに書きました。　何んの補ひにもなつてゐないかも知れません。　又二篇ともつまらないものだと思ひます。　しかしあの事件を題材にした點に於て、そして此の集をあの事件の記念たらしめたい點に於て捨てられなく思ひましたから特に入れました。

▲此の集を刊行するにつき前田夕暮氏の一方ならぬ御盡力をを忝うしました事を深く感謝いたします。

大正三年三月博多にて

著者識

目次

獄中哀歌……一—四八

序　蜜蜂の王……三

その一　朝の自由散歩……五

その二　盲目囚人……八

その三　眠れる蜘蛛……一二

その四　赤き夕の悲哀……一三

その五　眠くなき夜……一六

その六　暗室……一九

その七　辨當……二三

その八　獨居監にて……二四
その九　鳴る鍵の束……二六
その十　弱き心……二九
その十一　降り來る煤……三一
その十二　たゝずめる花……三四
その十三　延びたる爪……三七
その十四　蠅……四〇
その十五　雨の監房……四三
その十六　心の輪……四六
蜘蛛……四九―一一三
慰籍……一一三―一六六

赤き日……一六七―一三七
鳴らぬ笛……一六九
眼……一七三
柳の下……一七五
流るゝ砂……一七七
芽……一八〇
搖るゝ階段……一八二
小供の頃……一八五
眠れる嬰兒……一八七
淋しき野の如きものなり……一九〇
春の夜……一九三

花の亡靈……一九六
啼かぬ小鳥……一九九
第二の心……二〇一
小鳥と赤き夕日……二〇四
路上所感……二〇六
夏の宵……二〇八
暗き室の入口にて……二一〇
夜の白樺……二一一
眠の底へ……二一四
日傘……二一七
止れる時計……二一九
銀の煙管……二二一

長き路……二二三
蠅の木伊乃……二二五
ピストルの口……二二九
雨の夕……二三一
橋の欄干……二三四
未だ見ぬ夢……二三六
女の歌……二三九—二六八
死せる眞珠……二四一
お照……二四五
お座敷へ……二四八
銀の鈴と赤い夢……二五〇

獄中哀歌

死せる卵……二五五
水の上……二五八
失せたる櫛……二六〇
抜毛の束……二六三
姉……二六七
暗き背景……二六八
ほゝゑみ……二七一
或る夜……二七五
紅色の花の一片……二七四
家出……二七六
病める日……二七九
暗き木立へ……二八一

（序）　蜜蜂の王

かゞやく蜜の層のたゞれる暑さに
くるしげに身を廻はしうめく蜜蜂。

氣もさほし、次第に滅入りゆく
蜂のその長いうめきは
ねぶたさを一すぢに引くやうに。

蜜蜂の巢の中の
慄へる蜜の溶くる

そのだるさ——その音の
身體を何かながれるやうに。

くるへる蜂のかゞやくかたまり、
その中に大きな靈魂の
座し居るやうにひかりて。

飽き〳〵したる獄の長き一日を
日もすがら、うすぐらき巢の奥に
蜜蜂の王はきら〳〵とひかりて。

（その一）朝の自由散歩

監房をとりまく赤い煉瓦壁、
にげられぬやうにとりまく高い壁。

監房を出づ、その壁のまはりを
隱亡のやうに
くらい顏を振りつゝ歩く。

外へいづれば、あをき空のぬくもりに
すはれたく、はたのび上りたく

かすかに躍る心。

よき薫りのする青葉の繁りが
影のみのやうな心を
ぢつと覆ひて。

白き砂のうへに
どこからともなきうすき光が
わがほそ長き身體（からだ）のかげをうつす——

われともおもへぬそれを見れば
くらい心が

ふと向き直りてふるへながら。

獄の中から逃げ出でたさに
壁をひそかによぢ上らんとす。

(その二) 盲目囚人

何の悪事をなせしか知らねども
二疊敷ばかりの室(へや)の
くらい蓆の上に
けふも座して手探りに網をすく。

こゝをわが家とおもひ馴れ、
強ゐられし仕事に馴れし悲しさ。
何も見えぬ悲しさに、

盲(し)ひし眼の縁を
見開かんとあせりうごかす。

八月の暑さに屋根裏の
蜜蜂の巣のけだるきうなり、
ねぶたさをみちびく聲。

山櫨の葉のつかれて下りし
ちからなき綠のかげの弛(だる)さ。

白きぬけがらのやうな網の
長さを手にてはかりながら

ひとりうなづく暗い顔。

盲ひし囚徒は蒸し暑い監房の
うす暗きかたすみにぢつと座(すは)りて。

(その三) 眠れる蜘蛛

しづかなる監房の中(なか)、
天井の蜘蛛は動かず。

くらき蓆の上に座す、
うなだれし頭のおもさが
頸のまはりに、鉛のやうに——

天井の蜘蛛はうごかず、
その彎(かぎ)のある足が

くらい心にしがみつく。

ものをおもふ、あやしき悲しさが
五器口を出たり、入つたり
おちつかぬ席の上。

つかれし身體と重き心の
やり場なさにぢつと座す。

天井の蜘蛛はうごかず、
くらい心の上に
眠れる蜘蛛はうごかず。

（その四）赤き夕の悲哀

監獄の赤き夕日、
だんだらの
赤き光が喘ぐ。

監房のくらき窓をてらす
ゆふ雲のおりて來る心の上。

誰れも居らぬ廣い庭の
白き砂の上に

おちたる入日の影を敷く。

山櫨のあをき繁りのなかには
やがて眼の見えずなる雀が
あまりに赤きゆふ日の方を向いて。

幾棟もつゞきし監房の
どこからともなく深き底より
狂へる囚人の、ふと、笑ふこゑ——

長き間、獄の中にあれば
いつも夕のかなしくなりて

泣かんとしては覺えず笑ふ。

その笑ふ聲を聞く、
ひとごとならぬあやしき悲しさが
身内を脈うちめぐる。

くらい心が震へ出す——
そしてわが遠き行く手が
赤き夕日の中に入りて消ゆ。

（その五）　眠くなき夜

青ざめし蒲團を二つに折り
その中にそつと入りて臥す。

なにものかに追はれて
にげ場をうしなひし心の
うごけずなりしやうに臥す——

ぢつと臥す、その床下より
蟋蟀（こほろぎ）の啼く聲きこゆ、

囚人のくらい心を
たづねてくる悲しき聲——

その聲をいつまでも聞き居れば
蒲團の上に臥せる心がくらき層を下へ下へ。

ふと目をあけて見たくなりし
われと言ふものもわからず。

つかれて居れど眠くなければ
夜（よる）に飽きたる身體（からだ）のやり場なさ。

たゞぢつと蟋蟀の聲を聞き
寢返りなどして長き夜を明す。

（その六）

暗室

暗室の中に囚人の
ううゝううとうめく聲。

何ものか咽喉をしめるやうに
ううゝううとうめく聲の
次第におちてゆく暗い底。

長き鎖につながれて
ぢつと座れる心が

室ぢゆうをうろ〳〵しながら。

夜——晝——夜のいつも變らぬ暗さに、
とぢこめられて飽き〳〵せし後(のち)
次第にあせりはじめ、狂ひ出す。

縫ひつけられし物のやうに
うごかざる身體(からだ)の重さと弛(だ)るさ。

身體(からだ)にまきつける黒き鐵鎖が
ぢやらんと物におびえ鳴れば
何かしらずふと急に追ひくるやうに。

ふるへる心とふるへる身體(からだ)、
四人はううゝううと獸の
死にゆくやうに呻く。

（その七）辨當

五器口よりさし入れし辨當を
蓆の上にてむくり〳〵むくり。

ボロ〳〵の引割麥の
一盛りの飯と菜葉の副食物。

辨當はいつしか美味くなれり。
むさぼり食べるやうになりたり。

その飯に赤き夕日が照りて
四人にふさはしきわがくらき顏。

何故か長く獄にあれば
檻の獸に似てゆく心地す。

（その八）　獨居監にて

今日も座す獨房の
うすぐらき蓆の上。

ぢつと座る心の
ふるへる暗い顏。

眠くはあらねどうつらうつら、
たより無さに身體（からだ）の
どこか知らず無くなるやうに。

次第にふかい底へ
座りながらおちゆく心、
それもつひに支ふる能はず。

しづかな日は房外に照り輝けども。
追ひまくられるやうな
おちつかぬ心が續きて。

たゞひとり笑ふやうな顏、
泣くやうな眞似をして
あき〳〵したる長き日を紛らす。

（その九）　鳴る鍵の束

ふと眼をさましぬ、夜のくらき監房に
すや〳〵と眠れる心の方へ
鳴りながら來る鍵の束。

監房の方へ夜警看守の
腰につけし鍵の束、
その鍵が歩くごとに磨れあうて鳴りながら
ふと、ぬけがらのやうな身體（からだ）の
わが寢姿をのぞき見らるゝけはひに
臥せる心がふるへ出す。

シーンと鳴る深き夜の靜けさに
われはわが眠たげたる息の
次第に滅入るかすかな音を聞く。

ふと眼覺めたる心の上には
臥せるわが姿がうつりて
獸の横り居るやうに見ゆ。

夜警看守が監房の廻りをめぐれば

その眼ざめし心を追ひくる鍵の束。

青ざめしうすき蒲團の中に
ふるへる心をくるんと包みて
ぢつと臥す——監房の長きくらい夜。

（その十）

弱き心

看守に媚びんとせし厭やな心の
われにありしを今尚忘れず。

看守に媚びんとせし厭やなほゝゑみを
もらせしことを今尚忘れず。

監房のまへに看守が來ればおどろきてつと引き直る心。

何かわれに言はんとするを
ぢつと待てるおちつかぬ心。

看守と眼を見あはすればにげるやうにその眼を外す。

何かしら許してもらひたしと
甘へる犬のごとくうなだれながら。

われしらずふとこゝろにも無く
されごたしかに媚びんとせしを忘れず。

（その十一）

降り來る煤

器械場の細長き煙突が
さしあげし腕のやうに立ちて
光らぬ煙をむく〳〵と噴き出す。

煙は空に幕の如くたなびきて
うかべる黒き煤が下へ、下へ、監房へ。

監房のすぐまへに山櫨の繁りあれども
その青き葉かげは心に届かず、

心の覆ひとならず。

裸體（はだか）にされしやうな心へ、
ふわり〳〵と浮びて
あそびながらふりくる黒き煤。

その黒き煤の泌み入るをみつめながら、
掃はんともせずなるが儘になす
やゝすてばちの獄に飽きし心。

とてものがれぬ身なれば
なるが儘になりゆくわが心を
ぢつと見てゐたきおもひもするなり。

（その十二）　たゝずめる花

監房をとりまく煉瓦壁の片すみに
名もしらぬ草が仄かな花をつけたり。
おづ〳〵とあらはれし青き芽が
次第にふとりて小さき花を一つ。

看守等の眼にも觸れず赤き花を
こつそり一つ、獄のなかの
心が向ふにうつりしやうにつけたり。

やうやく咲きしほのかな赤き花、
紅皿のなかより抜けいでしやうな花。

その花とわが心とが
何かしらず問答す、互におなじ事を
おもへるやうにぢつと向きあひて。

また、ぢつとその花をみつめて
まぎれざる長き日を暮す
泣きたくなりしわが縛られし心——

くるはんとする心のすぐ前に

赤き花が一つほのかにたゝずむ。

（その十三）　延びたる爪

いやらしき延びたる爪、
指のさきに何かつきしやうに
いやらしき延びたる爪。

十本の指の爪、
いつの間にかそのさきがおなじやうに
延びたる爪。

爪をとる刀物のなければ

ひそかに壁の下にしのびゆき、
小供等のあそびごとのやうに
煉瓦の赤きおもてにてすりへらす。

あやしき音が壁におこれり——
壁のおもてと爪の先とが獨言くごとき
かすかなる不思議の音がおこれり。

それをきけば獄の中のくらき心を
すりへらさるゝとおなじ思ひが
煉瓦のおもてに映る。

壁には白き縞が出來たり——
かなしき心を描きし
爪のあとがもや〳〵と白くうかぶ。

囚人の心が壁のおもてにうつれり、
その爪のあとは煉瓦にしみ入り
壁の記憶となりていつまでも殘る。

いやらしき延びたる爪、
順々にすりへらす
かなしき延びたる爪。

（その十四）　蠅

疲れし心の上に
黒き蠅が來れり。

その蠅はたゞ一つ、くらい監房へ
いづくよりか飛び來りて
くる〳〵とだるき身を廻す。

ぶい〳〵ともの憂き唸りが
呼吸のなかに入りてふかく吸ひこまれ

身體の所々に果敢なき眠たさを催す。

黒き蠅が來れり、
つかれしわが心を
餌のごとくおもひて來れり。

うすぐらき心の發するにほひを
いづくよりか嗅ぎ出して來れり。

ふと蠅の舞ふ音きこえず、
蠅はわが身體のどこか見えざる所に
ねむたくなりて止れり。

見えざる我が心の上に
舞ひつかれてとまれり。

（その十五）　雨の監房

音もなく雨降れり、
白きフィルムのつぎ目のごとく
ちら〳〵と心のうへにひかりて降れり。

音もなく雨降れり、
その雨のくらきかげが
監房へさし入りて心を追ひ廻す。

音もなく雨降れり、

その雨のしたゝりを見つめて居れば
黒き憂愁が心の方へ躙り寄る。

わが心とはおもへぬ心、
囚人のつめたくなりし心に
おちくる雨。

うすぐらき心の底に
たまらんと降りくる雨。

雨の日の獄の黒き憂愁は
ふとき錘となりて頭のうへに

ぢつと垂れ下る。

見えざる深き覆ひとなりて
棺の蓋のごとく心にかぶさる。

すべて憂し、雨降れり、
白きフィルムのつぎ目のごとく
ちら〳〵とひかりて降れり。

（その十六）　心の輪

多くの囚徒が輪をなして歩く、
山櫨の青い繁りの周圍を
くる〳〵とその輪が廻る。

編笠の細きすかし穴から
やる瀬なき眼をかゞやかし
黄色い日かげを見まもりながら。

編笠のなかの息のつまるくるしさに

しかめし顔がいくつも並びて
大きな輪をつくり無言に歩く。

追はれるやうなおちつかぬ心が
山櫨の青き繁りの
たれ下りたる葉先にすがる。

一樣にかなしきおもひを抱ける
囚人の輪が太息を繋ぎ合す。

黄色い日かげの下に立ちて
一足ごとによろめく歩みを

いつまでも續けていづくへ行くや。
いづくへ行くと言ふにはあらず、
無言の長き歩みが
たゞ山檻の繁りの下を廻る。

囚人のかなしき心の輪が
山檻の繁りの下を廻る。

蜘蛛

蛛

一

南の國のその監獄は、ずつと昔から殘つてゐる極く舊式な古い建物で、外圍（そとがこひ）の高い壁も昔風の瓦と漆喰とで築きあげたのが、所々漆喰の剝げ落ちて臟腑のやうに中身（なかみ）の赤い土をはみ出したり、瓦に青い黴が生へてヌル〳〵辷りさうな所があつたりして、門も城下の町邸などに好く見受ける高い大きな眞黒い物だつた。獄舍は一寸した雨や風にも腐朽し破損して、その都度古い襤褸（はろ）を繼ぎはぎするやうにその個所だけ新しい板片や壁土で如何にも不調和に修繕された。

Mは刑事に引かれて門の前に立つた。その一隅の小さい

横長の窓の縁を刑事がトン〳〵と輕く指の先きで叩くと、中にゐる門衛の看守が窓からそつと覗いてうなづいた。Mはその大きな黒い扉が左右にバッと廣く開くのかと見てゐたら、開いたのは横の方の小さい通用門と言つた風の扉であつた。

『さあ這入るんだ』と刑事が小舍の中に家畜を追ひ込む意地の悪い番人のやうに言つた。

Mの右の手首には汚れて鼠色になつた捕繩が堅く縛してあつた。これ迄多くの犯人の手を縛つた捕繩が手首の所から羽織の袖の中を潜つて右の横腹に出で、更に腰の邊をグルグルと二重ばかり捲いて帶にしつかり結びつけてあつた。普通の人の知らぬ結び方が幾つもしてあつて容易に外れさ

うになかつた。しかしこれが通常の刑事被告人だと兩手を一緒に搦め合せてその捕繩の一端を、いくら不意にもがいても逃げられぬやうに必ず刑事が握つてゐるけれど、Mはその土地の大きな保險會社の社員だつたので、いくらか尊敬する氣味もあり、又無論逃亡などしさうな者でないと見て、刑事も安心して極く寬大な捕繩の打方をした。彼れの捕繩は一寸他人の眼につかぬやうにしてあつたので、刑事と肩を並べて裁判所から町端れのその監獄へ歩いて來る時も、知らぬ者は彼れを監獄行きの一人だとは氣がつかなかつた。

門を這入ると人氣の無いひつそりした古い大きな二階造りの建物が夕暮のわびしさにシーンと鳴つてゐた。眞向ふが玄關らしいが、Mはそこへは連れて行かれず、又も左の方の

黒い小さな門を通つて、恰度その建物のツマの方に當る狹い訊問室と言ふのに入れられた。入口の所で下駄を脱いで跣足の儘立たせられると冷(ひ)や〳〵するセメントの叩きの上に零れた砂が蹠(あしのうら)に痛痒かつた。

そこには一人の看守が机に凭れてゐた。刑事は懐から活版刷の護送狀を出してそれに看守の檢印を貰つて出て行つた。それは刑事被告人としてのMを監獄に受取つたと言ふ印(しるし)がされたのだ。Mは自分の身に關する運命の神のやうなその護送狀が看守の手から刑事に返へるのをチラリと盜み見た。ホンの一眼だつたので詳しい文句は認知し得なかつたけれど、自分の姓名が稍々筆太に書かれて、その肩書の欄内に『詐欺取財』の四字の添へてある事だけは眼敏くも確めた。

看守は年齡や職業や原籍等を訊き、又Mの顏形や身體(からだ)の格好もヂロリ〳〵見ては厚い帳簿の中に書込んだ。數百名の囚人の素狀や犯罪や容貌等が一々記してあるその帳簿の中にMの頁が新らしく設けられた。

訊問が終ると奥の方から別の看守が來て、時計、墓口、帽子等の携帶品を悉く出させてその品目も帳簿の中に記入した。

『持つてる物は皆出すのだ。最う何もないかい』

『えゝ何もありません』とMが答へた。

看守は安心の出來なさゝうに袂の中に手を入れたり、襟の所を揉んで見たり、果ては眞裸體にして褌まで取らせたりして、疑ひ深い眼が何遍も身體をグル〳〵見廻つた後、濃褐色の深い皺だらけなズックの袋の中にMの所持品を押込んで、その

口を長い紐で堅く結へた。

つぎに看守は短冊型の小さい眞鍮の札を渡す。それには『一〇五』と番號が記してあつた。

訊問室からは直ぐそのすぢ向ひの倉庫の前に連れられて、青ざめた淺黄の薄い蒲團と木の枕と杉の打割に棕梠毛の緒の立つた下駄と金屬製の茶碗や竹の削箸を載せた膳とをくれた。蒲團にも枕にも下駄にも『一〇五』の番號が入れてあつた。

Mはその下駄を穿き蒲團を四つに折つて枕と一緒に左の手に抱へ、右の手に膳を持つた。不思議の運命を持たせられてゐるやうな薄氣味惡い感じに襲はれて、若し其所に看守がついてゐなかつたら、其等の物を打棄てた儘逃げ出したかも知れない。彼れはこれから囚人になると言ふ怪しき自分の姿を悲しげに見廻した。そして看守のくれた深い編笠をスブリと頭に被つた。

看守が先きに立つてMはその後について行つた。それは六月末の或る夕方でひどく蒸し暑かつた。青白い星が空の所々に浮び出て、死んだやうにひつそりした暗い獄舍の中へ引かれてゆくMの後姿を見送つて震へた。

すべての出來事がMにはわからなかつた。其日の朝の八時頃、やつと起きた許りの所へ家宅捜索に來た判檢事は詐欺取財の嫌疑だと言ふたけれど、如何考へても自分の眞直な心の歩みがそんな恐しい犯罪の方へ行つたとは信せられない。で彼れは警察で假豫審を開かれた時も、係檢事に對して泣か

ん許りに色々辯解して自分の本當の心を見せやうとしたけれど、何の効果も無かつた。

編笠の中からは足元が搖れる地面を見るやうにフラ〳〵するのみならず、且つともすれば頭に馴れぬ編笠がグルリグルリ廻り傾き、そこから少しばかり外の見える透かし穴が横の方へ外れて眼が塞がれるので、その都度立止まつて笠を被り直さねばならなかつた。

獄舍に行くには小さい同じやうな木戸を幾つも潜つた。その木戸には一々鍵のかけてあるのを看守が大小種々の合鍵で、それを外し又かけた。左へ曲つたり右へ折れたりMの疲れた頭の中には自分の歩いて行く路が廻轉し惑亂し果てはその方面を判ずる事も出來なくなつた。暫くすると小さ

く區分つた長い獄舍の一室の前に着いたので、Mは編笠のすかし穴から覗いて見ると、薄暗い其一室に八九名の未決囚が何れも表の方のまだ暮れ殘る晝のうすら明りをマジリ〳〵見守りながら坐つてゐた。彼等の視線が一齊に光つてMの上に注がれる。室の片隅に網をすいてゐた卅四五の一人はヂロリと向けたうす暗い眼を如何にも興味の無ささうに直ぐ引き直して又網をすき初めた。ずつと後の方の顏の青白い廿歳ばかりの一青年はヒステリックなおど〳〵してゐる樣な顏をつき出し氣味に新來のMをぢつと見つめてゐたが、驚て何故かにやりと笑つた。

看守が又一人來た。それは看守部長であつた。彼は腰にかけてゐる大小幾つもの鍵の束の中から、最も大い、そして毎

日幾回と無く囚人の出し入れに使用するので、その先きのピカ〳〵光つてゐる一個の鍵を擇り出して、監房の戸の錠の穴に入れた。錠が外れると閂の大きな鐵棒を横へ引抜かなければならない。その鐵の棒は深く喰込んで他の鐵の穴から離れまいとするやうに鋭い物狂はしい厭やな音を發して此の靜かな沈默の底の廣い監獄中に響いた。すべての囚人は此の音が何であるか知つてゐる。無論今時分房から出て行く者は無いので、彼等は『そうれ、又一人連中が殖えたぞ！』と顏を見合せた。

監房の厚い扉が開くとMは穴倉に投込まれるやうに入れられた。そして房の戸のビシンと閉つて錠の下りる音を震へる心に聞いた。

監房は六疊敷許りの厚い板張りで、前と後とが格子になり、左右は各々隣房と合壁だつた。左方の壁に棚がついてゐて、その上に食器や齒磨道具をキチンと定められた場所に並べ、右の壁下には蒲團が二つに折つて上へ上へと積み重ねてあつた。

囚人は九名ゐて、縱に三列に、何れも表の格子の方を向いてゐる。Mが房に這入ると一番年上らしいのが立つて來て、此房の先輩だと言つた風の態度で先づ蒲團の積み方を敎へた。蒲團は番號の記してある白い襟を格子の方へ向けて揃へるのだつた。

つぎにMの坐るべき席順がきめられた。矢張りその年上の

『席は何所にしやうね、これで十人だが……』と言ふと、

『さうだ、十人なら都合が悪いから皆な席をかへねばなるまいよ』と他の一人が答へた。これを機會に此の狹い一室に何か大事變が起つて評議でもするかの樣に一同立上つて室の中央に集つた。朝早くから夜になる迄、房外運動と便所に行く時とを除く外は、終日厚い板張りの上の堅い蓆に坐つた儘滅多に身體を動かすべき機會のない彼等にとつては、どんな小さいチャンスが來ても殆ど反抗的に仰々しく立上つたり、動いたりして停滯した血液を身體の隅々に送るのが氣紛らしでもあつた。立ち上る時看守に知れぬ樣にそつと脊延びをした者もある。これが爲め房内が少し騷ぐと格子の外から終始覗いて居る看守が、

『矢釜しいぞ！』と叱つた。

一同の席は最初と變らう筈がないMの席は一番後の顔の青白い青年の横だつた。彼れの前に坐つてゐる眼のギロッとした眷の高い男は、格子の外の看守が他の房の方へ監視に行くと、後を振り向いて、

『君罪名は？』と聞いた。

『詐欺取財ださうです』とMが答へた。

『連累は？』

『四人ありまず』

『そいつは長いぞ。まづ豫審に半年位かゝるから、君餘程しつかりしてゐないと駄目ですぜ』

『えゝ半年！そんなに長く豫審がかゝるのですか』とMは驚

いて尋ねた。

『かゝりますとも、連累が四人もあれば大丈夫かゝります』

此の話は極く小さい聲で交されたけれど、向ふの隅に網をすいてゐる男の耳に這入つた。

『詐欺なら懲役十年以下だよ』とその男が口を入れた。他の四人も交る〳〵Mの顔を覗いて罪名を口から口に傳へた。

そして誰か一人が隅の方から、

『此房は丸で詐欺と横領の巣窟だね』と言つた。Mの横の青年は只その神經質な青い顔にニヤリ〳〵病的な笑みを浮べてゐた。

監房は最う暗くなつて間も無く就寢の時が來た。恰度房の裏手らしい稍々遠い所に懶さうな汽笛がブウ〳〵と長く

鳴ると、看守が『就寢々々』と命令を觸れ廻る。それは午後の七時であつた。

十人の床が五人宛足を突合して寢た。一枚きりの薄い狹い蒲團を二つに折つて樫葉餅の樣にその中に身體を入れる。脊の高いMは足を延すと踵から先が蒲團の向ふに突き出た。

Mの横には青年が寢てゐた。病身らしい青白い痩せたその身體が昆布卷の樣に蒲團にくるまつてMの身體に密着してゐた。Mは青年の後頭部の汗臭い匂を嗅いだけれど、その身體からは何の體温も傳つて來ない。まるで温りと言ふものゝ無さうな青年のその身體の寢姿が石塔を横に倒してでもあるとしか思へなかつた。

ふと青年がMの方へ向き直つて小さい稍々震へを帶びた

聲で、

『あなたは詐欺取財ださうですね、私は横領ですよ』と言つた。

死んだ様な暗い静かな房内にその聲が何者かの細い呻きの様に響いて、やがて又シーンとした。

『横領？業務上ですか、それとも普通の横領ですか』とMが訊いた。

『業務横領です。父が長い間病氣をして藥代にも困つてゐるのを見るに見兼ねて、店の物を二三回持つて歸りましたら、こんな事になりました』

『では君は何所かの番頭でもしてゐたのですね』

『えゝ○○町の○○呉服店に小さい時から居りました』と青年は答へて暫く口を噤んだ後、

『それから私は肺病です。極く初期で、咳なども滅多にしませんけれど、傳染するつて併しのものが厭ひます。私は此の房の厭はれ者です』と言つた。

と急に又向ふへ弛さうに寢返りして深い溜息を三四回ついた。

不思議にもその夜のMは好く眠つた　豫審に半年もかゝると言はれた事や、懲役十年と言はれた聲が、堅い塊のやうになつて彼れの心の底に滯つたけれど、晝間の疲れが一時に發したと見えて、心も身體も蒲團の綿に吸ひ取られるやうに感じつゝ、何時の間にか深い眠りに落ちた。

彼れの横の青年は時々うなされたり、身體をビリ〳〵震はせたりしてゐた。

二

監房の第一夜は明けた。Mは起床時刻の三十分位前から眼を覺して、好く眠つたとは言へ尚どこか身體に眠り足らぬ所のあるやうな懶い感じの中に浸りながら起床時刻の來るを待つた。牢獄の朝の薄暗さがまだ房の隅々に溜つてゐた。

起床は五時で、それから約三十分もすると朝の飯になる。赤い獄衣を着けた既決囚の炊夫が一定の型に入れて盛つた荒いボロ〳〵の麥の引割飯を擔荷の様な物に載せて來て、五器口から差入れる。白湯と味噌汁は短い筒のついた桶を持廻つて、その筒の先きを五器口から差込むと房内の囚人が茶

碗を出して受けた。朝の監食は飯と味噌汁と澤庵が二片だけだつた。Mは彼の青年と並んで箸を取つたけれど、どうしてもボロ〳〵の飯が咽喉を通らなかつたので、生温い白湯を注いで流し込んだ。

辨當の差入のある者は少し後れて房外に出で、セメントの叩きの廊下に膝をついて食べた。Mの房には差入のある者は三人しか無かつた。

Mに取つてはすべてが最初の經驗であり、同時にいくらもがいても免れられぬ力強い運命だつた。食事がすむと又以前のやうに列をなして坐る。これから晝間の長い一日ぢつと坐り暮らさねばならない。

看守が房の戸を開けて、

『百五號』と呼んだ。Mはもう自分の本當の氏名を呼ばれずに番號だつた。彼れは入監の際訊問室で貰ふた眞鍮の番號札を他の囚人の如く左の襟に結びつけてゐた。

監房を出て診察室に導かれた。すべての囚人が入監した翌日屹度此所で獄醫の身體檢査を受けねばならない。診察室からは又訊問室に入れられて前日よりも最つと詳しく色色な事を訊かれた。最後に看守が、犯罪の動機と言ふのを、『お前も矢張り女に狂つて金が欲しくなつたんだらう』と勝手に決めて了ふたけれど、Mはそれを爭ふ勇氣もなかつた。

以前の監房に歸つのは九時頃だつた。あちらこちら引き廻されるのが一々不安と恐怖とであつた。彼れは寧ろその監房の固い蓆の上にいつまでも坐つた儘、たとへ身體がその

蓆にこびりついて離れぬ樣になるにしても、矢張り其儘の不動と靜寧とを欲した。併し彼は驅て又其房から呼出されて今度は其所から少し隔つた第一獨居監と言ふのに移された。

Mは六月の末から九月の中頃迄約八十日間未決監の一人であつた。その長い生活が此の獨居監の中に來た。

獨居監は二疊敷の一軒建で、表と裏とが大きな角材の荒い格子になり、左右は厚い壁板を張りつめられ小さい便所が裏の方に別につけてあつた。房の中には古い汚れた蓆が一枚と、その片隅に掃除用の水を入れる桶が二つと、白湯入れの土瓶と、其他食器を載せる棚もあれば壁にかけてある。囚人の生活に必要なものは一通り揃つてゐた。

監房の外は白い砂の光る空地を三尺ばかり殘して高い煉

瓦壁で四方を取り捲いてゐた。

獨居監は相當の身分ある者を入れる所だつたけれど、看守の眼を盜んでこつそり話をする機會のある雜居監から、此の獨居監に移された者は急に一人になつた淋しさを味はなければならない。Mは席の上に表へ向いて坐つた。そして雜居監の我れと同じ囚人の一團から只一人遠い所へ離れて來たやうなさびしい自分を發見すると共に、やつと今移されて來たばかりの落ちつかぬ心がウロ〳〵して、兎もすれば房内の何所か見えぬ所にある墓場のやうな深い暗い穴の中に這入つて行くのではないかと感せられた。心臟の鼓動や體温のない死んだ身體になつて行くやうでもあつた。

監房の格子から外を覗くと、赤い煉瓦壁の向ふに山櫨と青

桐の新緑がむら〳〵と繁つてゐた。既決囚の監房も屋根から上が見えた。避雷針が六月末のピカ〳〵する日光に光つてゐる。好く晴れた青い空には白い雲が如何程地上から聲を掛けても知らぬ顏をして過ぎゆきさうに高い所をふわり〳〵浮んでゐた。太陽の光線は濃淡が出來光つたり陰つたりしたけれど、偉大なる彼れの姿は見えない。監房の恰度眞上が毎日彼れの通る路らしい。

Mはそれらの異つた氣分の景色を眺め乍ら頻りに自分の運命が考へられた。山櫨の青い繁り、監房の尖つた屋根、もやもやした白い雲、さう言ふものが悉く彼れの運命の一つ〳〵をシムボライズしてゐた。彼れは他の三人の連累の事も考へずにはゐられなかつたけれど、如何考へても同情する氣に

はなられず、自分自身の同情すべきものは此の一個の自分の外には何も無かつた。

その日の晝食から會社の友人が差入れる眞四角な黒い漆塗の辨當を食べた。看守が五器口から差入れてくれた辨當を坐つた儘兩方の手を延して受取ると、手がぶる〳〵震へた。そしてその辨當を左の手に抱へてムクリ〳〵食べる姿が恰度動物園の檻の中の獸のやうだつた。これが本當の自分だらうかと怪しまずにはゐられなかつたが、而かもその今迄とは全く異つた、曾つて見た事も無い姿が矢張り本當の自分であつた。

長い午後が辛つと夕べになつて、雀の群れが歸つて來た。監房の屋根瓦の間や山櫨の繁りの中には幾百羽となき多くの雀が棲んでゐるが、それらは毎朝眼が見えるやうになると町に餌を拾ひに行き、夕方群れをなして歸るのだつた。彼等は夜が來て再び眼の見えなくなるまで、山櫨と青桐の葉の上を飛び廻つて出來るだけ矢釜しく騒いだ。その日町で見た事や聞いた事を互ひに語り合うてゐるやうでつた。小さい子雀もゐた。親雀らしいのが『皆な歸つて來たかい』と言つた風に、その數を調べるらしく彼方此方見廻し乍ら飛ぶもあれば、電線にとまつて沈みゆく夕日の赤い名殘を眺めてゐるのもあり、又不圖した事から——吾々人間には全く然うとしか思へないが——喧嘩を挑んで、小さい嘴で激しく啄き合ひ乍ら二羽とも地上に落ちると直ぐ仲が直つて又昇上るのもあつた。

雀の群れが夫々深い葉隠れを撰んで隠れ、その騒々しい聲が聞えなくなると最う暗い夜である。就寢の汽笛が鳴つて蒲團の中にくるまると、Mは初めてその日の重荷を下した樣な氣がした。

けれども彼れはその夜から容易に眠附かれぬ苦しい夜が來た。多くの囚人が最初の夜は反つて好く眠るけれど、その次の夜からは眠られないのだつた。

夜警看守の靴音が監房に響いて、彼れの眠らうとする心を屢々呼び覺した。看守の腰につけた監房の多くの鍵の束が歩く毎に磨れ合うて鳴つた。洋劍の鞘もガヂャン〳〵と鳴つた。それらの音が遙か向ふの監房の方から段々近づくにつれてMは『又看守が來た！』と心の中に獨言く。看守が表の格

三

未決囚は毎朝房外運動をする。雜居監にゐる者は四五十人宛（づ）廣場に呼出して大きな輪を作らせ、三尺許り宛（づ）間を置いて小さいわさのつけてある一條の長い苧繩を握らせる。囚

子口に立つて提げた角燈の口を監房の中に向けると、角燈の光が臥つてゐるMの顏にサットと流れた。たとへ眼を如何に堅く閉ぢてゐてもその光を眼蓋の上に感せずにはゐられない上に、一人の看守が監房の周圍を一周して漸く去つたかと思ふと又別な看守が來るので、彼は二時過ぎまでもおち〳〵眠られず、狹い蒲團の中で幾度も寢返りを打つて苦んだ。

人はそのわさを左の手、首に掛けて前の人と後の人と互に一定の間隔を取つて一二三と歩き出す。成るべく手を大きく振り足を高く擧げなければ直ちに看守が叱り飛ばす。中には弱々しい痩せ衰へた肩の邊を恐しい力で突き飛ばされてヨロ〳〵と轉げ掛るのを漸く苧繩で支え止める囚人もゐた。その四人は肩の痛さに顔をしがめ乍ら又力を取直して歩いた。彼等の中には汚れたをだらしなく着けたのもゐれば青い未決の獄衣を着たのもゐた。顔は青ざめて眼が大きく光つた。そして此の動物のやうな行列は青い山櫨の繁りの下を、何れも深い編笠を被つてグルリ〳〵と歩き廻つたが、歩く毎にその編笠が頭の上を搖れた。

雨天の日は房内運動だつた。ゴトン〳〵と物々しげに各

各の監房からその足音が聞えた。

獨居監は六時から三時間許り自由散歩を許される。監房の戸はあけた儘であるが、その代り四方を取捲いた煉瓦壁の周圍の入口に戸があつて鍵をかけてゐた。看守が監房の戸をあけてくれるとMは、檻の中の獸が躍り出る樣にその狹い出口から狼狽へまくつて飛び出す。彼れには此の自由散歩がどんなに嬉しかつたか知れない。

朝の六時！監獄の夜は漸く明けた許りで、囚人と殆んど同じ時刻に眼を覺ます習慣のある雀の群れは、再び眼の見える樣になつた嬉しさを語り合ひながら、町へ餌を拾ひに行く準備に忙しかつた。山櫨の青葉の下には電燈の光がまだ消えずにゐて、一晩中點つた疲れがその光に出て、煙のやうになつ

た電球の内の赤黒い色が痛々しくMの心に映つた。朝の新鮮な空氣は山櫨や梧桐の深い葉がくれから流れて來る。彼れはそれを成るべく多く吸うて縮み込んだ肺臟を以前の面積に押擴げた。

彼れは監房の周圍を足にも力を入れて歩いた。恰度隣りも煉瓦壁を隔てゝ獨居監になつてゐるが、その房の囚人も散歩をしてゐると見えて足音が聞えた。

隣房囚は何者だらう、どんな罪名の許にどんな男が繋がれてるのだらう、とMは好奇心を驅られずにはゐられなかつた。けれど其所には高い煉瓦壁があつてその姿を遮つた。

Mには壁の向ふの足音が自分と全く同じ足音であるのみならず、或は自分自身の足音が何かの作用で壁の向ふに聞えるのかも知れぬと考へた。白い砂を踏む杉の打割下駄がザクリ〳〵と響く。何んと言ふ淋しい音だらう、まるで死人の歩くやうな音だ。もつと活潑に歩け、生々と歩け、廣い明るい娑婆の路を歩くやうに歩け——Mは斯う考へては足に又力を入れるのだつた。

不意に隣房囚の足音がとまつた。と煉瓦壁をコツ〳〵と指で叩く音がする。それは合圖であつた。確かに自分に何か合圖をしてゐるのだとMは氣附いたけれど、何んだか薄氣味惡い物に觸れるやうな氣がして壁の方へも歩み寄らなかつた。

然るにその合圖は數回繰返されたので、Mはそれに對して返事の合圖をなすべきや否やを考へると、身體の何所かゞ震

へる様に感じながら、全然聞えぬ振りも出來なくなり、思ひ切つてそつと壁の下へ躙り寄つて、向ふの人の叩いてゐる所とはずつと離れた所を極く微かにコツ〳〵と叩いた。彼れは隣房囚の叩く壁の面の直ぐその裏に當る所を叩くのが臆病な心にどんなに薄氣味惡いか知れなかつたのだ。

と彼れは隣りから何か話を仕掛けてゐる様に感じた。極めて細い〳〵聲が煉瓦壁の向ふから傳つて來るけれど、その小さい聲が高い厚い壁の何所から洩れて來るかは判らない。彼れは赤い壁の面を彼方此方そのの聲を捜ねつゝ見廻した。と彼れは次第に一種神秘的な畏怖を感じて、つと壁の下から飛び退いて再び砂の上をザクリ〳〵と歩いた。隣房囚も駄目だと思ふたか、合圖も聲も止めて素知らぬ氣に歩き出す。

二つの足音が何等の關係も無さうに離れ〳〵に壁を隔てて起つた。

その日はそれだけだつたが、翌る日又もそれと同じ場合が來た。Mはいくらか大膽にもなつてゐたので、隣房囚の合圖に明らかに應答の合圖もした。すると一の片隅に向ふから細い紙縒がスーツの出た。そこには小さい穴が穿してある。煉瓦と煉瓦の間のセメントが刳り取られて小さな一個の透かし穴が出來てゐる。Mにはすべてが了解された。

いつの頃から又如何なる人によつて此の穴が穿たれたかは判らぬけれど、あの堅いセメントを斯う刳り取つて穴を拵へる迄には根氣强い、恐しい或る囚人の力が餘程なければならなかつた。

Mはその穴から隣房を覗くと、隣房囚の眼が片側と眼の附近とが僅かに見えた。

『私はSです。Sと言ふ者です』と隣房囚が言つた。

Mはまだ一度も會つた事も無く顔を見た事もないけれど、Sと言ふのは以前市會議員をつとめた事もある男で、その名前は幾度も聞いてゐた。Sは或る銀行の手形を僞造して五六千圓を詐取した事が發覺して、昨年の末此の監獄に收容された。彼れには相當の資産もあつたけれど、政治運動と放蕩の爲め殆んど全部費ひ果して、今は家族も彼れの差入物の費用にすら困つてゐる。

Mはこれがあの銀行詐欺のSかと珍しい物を見るやうにちつと壁の穴から覗いて、

『さうですか、貴人があのSさんですか。私は××保險のMと言ふ者です』と初對面の挨拶を述べるやうに答へた。

『どうして斯んな所に來たのです。罪名は何です』

『詐欺取財と言ふ事になつてゐますが、實につまらぬ事件です。一體こんな事になるべき事件ではないですけれど……』

『さうですかね……どうも今の法律は面倒ですね。私の事件は御承知でせう、例の銀行券僞造行使ですが、別にこれと云ふ證據も無いのに豫審も有罪だつたし、又公判も免れさうにありません。重くて三年、輕くて二年と言ふ目當をつけてゐますが、半年以上も未決に打ち込まれた上懲役何年は全く堪りませんよ』

『貴人はもう豫審がすんだのですか？』

『本月の十五日に豫審から有罪公判に廻されましたから、追つ附け公判だらうと思ひます。どうせ落ちるにはきまつてゐますから、その前に最一度裟婆の顔が見たいと思ひますけれど、何程請求しても保釋の許可が出ないのです』

『そいつは困りますね、保釋位許してもよさそうじやありませんか』

『兎に角昨年の末から此所に這入つたきりですからね』

『では貴人も隨分未決が長い方ですね』

『いや半年はまア普通です。一年以上もかゝるのが珍しくありませんからね。少し混入つた事件や連累の多い事件ですと裁判所の方が中々捗取りません』

一人が壁の穴に口を寄せると、他の一人が耳を穴につける。

話は斯うして交されたが、小指も這入らぬ位の小さい穴の話は屢々聞き取れぬ事があつた。殊に大きな聲だと看守に聞える虞れがあるので、成るべく小さい聲を出す。穴の中を通つて來る間にその聲は震へを帶びる樣だつた。

『看守が來ますから注意して下さい。もし見つかつたら大變ですから』とSが言つた。

『しかし斯んな穴のある事は看守は知らぬでせう』

『知りませんとも、一寸氣のつかぬ樣に出來てゐますからね』

『誰れが穿したのでせう』

『矢張り四人でせうね。何か釘のさきのやうなものでコッコッと幾日もかゝつて穿したらしいですね』

『ずつと以前からあつたんでせうか』

『さうらしいですね。私も此所へ來た時、以前貴人の房にゐた砂糖密輸入の先生から敎はつたのですが、こんな重寶な穴はありませんよ。此の穴を穿した奴は中々豪い事業を殘したものです』とSは輕く笑ひながら答へた。

時々看守の靴音が煉瓦壁の外を行つたり來たりする。と二人は壁から突き放されるやうに飛び退き、わざと足音を大きく歩いて熱心に散歩してゐる風を裝ふ。靴音が遠くへ行つてしまふと、二人は又穴の前に行き身體を壁にすり寄せて話を交した。

自由散歩の三時間が終つて再び監房に入れられる時分になると、

『左樣なら！』と互に果敢ない聲で言ひ合つた。

二人が各々別な監房に入れられ大きな鍵を掛けられて、それ〴〵長いものうい一日が來ると、その翌朝の自由散歩が切りに待たれた。

非常に蒸し暑い或日であつた。高い煉瓦壁が屛風のやうに如何なる風をも遮り、日光は壁の面や白砂の粒々に燒きつきて蒸されるやうな暑さが監房の中に這入つて來た。

暑さは午後の二時頃が盛りで、Mは手にも顏にも汗が滲み出て、腰から下はべた〳〵に濡れて組合せた足と足とは皮膚が粘りつきさうだつた。さう言ふ日には屋根裏に巢喰うてゐる蜜蜂がウン〳〵唸る。巢は天井裏の一隅にあつて、蜂の出入りは屋根板の細い節穴からだつた。

その唸りは午後四時頃迄續く。屋根裏の中の暑さに彼等

の築きあげた黄金色のピカ〳〵する蜜の厚い層が次等に溶け崩れるらしく、多くの蜂はそれを心配して狂奔し嗟嘆するのだつた。彼等は巣の中に塊をなしてグル〳〵廻りながら群れた。巣の外へ押出されて、眼も眩んだのか飛ぶ事も出來ずべタ〳〵と這ふ疲れた蜂もゐた。

Mはその唸りを蓆の上に坐つたまゝ聞いてゐると、疲れた弛い手も足も抜けてゆくやうな感じが、天井裏の唸聲から彼れの心に傳はつた。

あくる朝の自由散歩の時、

『私の監房には蜜蜂が巣を喰つてゐますよ』とMが言つた。

『さうらしいですね、監房を間違へて私の所をウロ〳〵する蜂もありますし、ウン〳〵唸る聲も聞えます』

『昨日の暑さは如何でしたやうでしたね』

『焦熱地獄そつくりです……これが雜居監ですと煉瓦壁がありませんから風も通つてくるし、こんなに暑くはないでせうがね……』

『あなたも雜居監にゐたのですか』

『ゐましたとも、一監の四房に五日ばかり……あなたは？』

『私も一監の四房に一晩居りました』

『あの房は初犯の者を入れる所です……まだ居りましたか、私の居つた頃あの房には肺病の青年がゐたのですが……』

Mは入監した夜の事を思ひ出した。

『ゐましたよ。死人の樣な顏をして「私は肺病です。皆から

傳染するつて厭はれ者です」と言つてゐましたつけ』

『さうです。あれは極く初期ですけれど肺病です。あれの父も矢張り肺病で如何も遺傳らしいですが……監獄で傳染病になるとそれこそ酷いですからね。あの青年は私も好く知つてゐますが、あれは全く父の犧牲になつたのです。業務横領ですから、一年以上十年以下の懲役ですが、全く可愛想ですよ。我々の犯罪とは性質が違ひますからね』

『さう云ふ事情のある事は私も聞きましたが、執行猶豫位ですみさうなものですね』

『執行猶豫は駄目でせう。あれには學問も身分もありませんし、殊に此所の裁判所は他に比べて罪が重い相ですから、どうしても一年半位打たれるでせう。勿論あの身體で、監獄ですと療養なんか出來ませんから一年半も勞役に服させられたら命はありますまい』

Mの眼には青白い青年の顏と人生も吾身も悲觀し切つて反つて冷笑してゐるやうな薄氣味の惡い頰笑とが思出されて映つた。

壁の穴の話は時々中止せねばならない。看守の足音のしない時でも、何所からか疑ぐり深い耳がぢつと聞いてゐるらしい不安が二人に絶えなかつたので、暫らく話しては散歩をし又話すのだつた。

『お互に身體を丈夫にして置かんと駄目ですぜ』とSが言つた。

『さうです。全くさうです』とMが答へた。

彼れは青年の事が氣に掛つてならない。親の犧牲——犯罪——入獄——遺傳——肺病——勞役——死——これがあの青年の運命だと考へた。そして自分は如何なるだらう！

彼れは己れの眞直い心を信じて、自分だけはどんな間違が此の世の中に生じても大丈夫だと考へながら、尙深い心の底には不知不識の間に落ちてゆく不思議な運命に對する不安が滯つてゐて、それを外へ排除する事は出來なかつた。

未決囚が此未決監から行くべき路はいつも既決監へである。百人に一人若くは二人しか晴天白日の身となつて裟婆に出る者は無い……彼れは暗い醜い恐しい己れの運命を見る樣な氣がした。

四

Mは入監してから五日になり、十日になつたけれど、豫審へは一度も呼出されない。『これでは長くかゝりさうだ』と考へた。

その日隣房囚のSは裁判所に送られた。朝の九時頃看守が來て、

『八十七號出廷！』と呼んだ。Sの番號は八七號だつた。と監房の戸の開く音がして、Sはザクリ〳〵下駄の音を立て乍ら連れて行かれた。Mはその音を聞いて、隣房に起つた出來事が自分の事のやうに思はれた。

監房の格子や天井は全部松の木だつたが、數十數百の囚人を交る〳〵此の狹い一室に押込んだ長い悲慘な記錄が、その古びた格子や壁に讀まれた。黑い手型や爪の痕もついてゐるし、色々な樂書もしてあつた。『監獄に欲しきは酒と女なり』と川柳めいたものが、何か堅い釘の先きのやうな物で書いてあるのも見た。Mはそれらの樂書を一つ〳〵別な違つた囚人の心に出會すやうな感じを抱いて讀んだ。

その日は午後から雨になつて、軒廂のない監房には格子の外から雨滴が地に落ちると共に跳ね上つて飛込み、直ぐ前に坐つてゐるMの膝に散つた。彼れは膝の上のその小滴を、着物の縞が吸取つてしまふ迄心をとめて見つめた。監房はジメ〳〵して蓙を被つた様な暗い思ひが續いた。

房にはいつも蜘蛛が出てゐたが、それは此の古い獄舍の柱や壁の腐れた所に產れる腹の平たくびつちやげた土色の大きな奴だつた。毎日二三疋は屹度出てゐたが、その中で恰度Mの頭上に當りさうな天井にぢつと這うてゐる一疋の蜘蛛が、Mには何か恐しい印のやうに思はれた。

蜘蛛は眠つてゐるのである。彼れは天井にこびりついた儘終日死んだ樣に動かない。そしてそれが毎日多少位置は變つてゐるけれど、矢張りMの頭上に當る所に眠つてゐた。その蜘蛛は足が四本しかなく、何かの時あの脫れ易い足を失ふた儘生へずにゐるらしい。或は曾つて此の房にゐた囚人から筆の先きのやうな物で追拂はれ、狼狽へまはつて逃げる際失ふたのかも知れない。

深い湖水や暗い淵には必ず主がゐると小供の時に聞いたが、此の蜘蛛もさういふ類のものかも知れぬ。蜘蛛は此の房に起つた多くの四人の出來事や運命を悉く記憶してゐるらしい。そして自分の運命の成行きをも注意深く眺めてゐるのだらう、とMは考へた。

Mは蜘蛛を追拂ふ事も出來なかつた。それは天井から落ちる虞れがあつたからで、あのぢつと動かぬ姿を下から見ても、あれでよく落ちぬものだと思へる位だつた。

終日堅い蓆の上に坐つてゐると、夕方は足の筋肉が伸縮しない樣になる。身體の所々に血液の循つて行き得ない所が出來るのだ。手足も臟腑も豆腐のやうに柔らかくなつて、いくら力を出さうとしても出ない。日に增し身體の衰弱して

ゆくのが感づかれて、その都度彼れは何か重い病氣になるやうな氣がした。

Sは夕方裁判所から歸つて來た。翌日は雨が晴れて自由散歩も許されたので待ち兼ねたやうに、

『貴人は昨日裁判所へ出たんでせう』とMが言つた。

『昨日が公判でした。辯護士も中々勉めてくれましたけれど、私は迚も駄目です。檢事が懲役四年の求刑をしました』

以前のSには多少の元氣もあつたが、此の日はまるで力が無かつた。Sには絶望の時が來てゐた。

『懲役四年！そりや餘り重いやうぢやありませんか』

『まア判事の方で三年か三年半位の所におさまりをつけてくれるでせうが、それも口でこそ何んでもないですけれど隨

分長いですからね……判決言渡は明後日です』

Sは幾度も太息をついた。それが小さい煉瓦壁の穴から

Mの方へ抜けて來る。

『控訴はしませんか。餘り重かつたら第二審に持つて行つたら好いじやありませんか』

『私もさう思ひますけれど、控訴すると未決が又早くて三四ケ月は要るし、それに辯護士やなんか費用が中々容易でありませんからね。それで運好く輕くなると好いですけれど、反つて重くならぬとも限りませんから、私は寧ろ第一審の判決に服しようかと思ひます』

『それもさうでせうが行ける所迄行つて見たらどうです』

『いや私はどうせ駄目です。新聞にも出された相ですから

御存じかも知れませんが、私は此所へ來る前少々金のあるに任せて○券の或る藝妓を落籍したのですが、それが最う小供を産みましてね、昨日來た手紙によると男の子ださうです。せめてその子だけでも見て落ちたいと思ひますけれど、先日も申した樣に如何しても保釋を許してくれません。保釋の出ない犯罪は餘程裁判所の方でも重く見てゐるさうですからね』

Mは○券某妓との關係が事件の發覺した頃の新聞に出てゐるのを見た事があつた。Sが不正の金は殆んどその藝妓に貢いだのだと書いてあつた事も記憶してゐる。

『さうですか、男の子が生れなすつたのですか。私などは小供なんてありませんから、その味がわかりませんけれど……』

『あの頃の事を思ふとまるで夢です』とSは追懐の情に堪へぬらしく、

『あなたには妻子が無いですつてね、私はそれがどんなに羨しいか知れません。こんな所に來るには成るべく係累の無い方が好いのです。それに私には隨分小供が多いですよ。長男が十七歳で、それを頭に今度のやうな特種の小供まで加へると七人あります』

『しかしお家族の困る様な事は無いでせう』

『兄が一切の事を處理してくれてゐますが、私が隨分馬鹿な金を費ひましたから、お恥しい次第ですが、家産なんか滅茶苦茶です』

その時煉瓦壁の外の路にドド〳〵と追はれるやうな只ならぬ數人の足音が聞えた。二人はつと壁を離れてその足音の遠去るを待つて又壁に寄添ふた。

『御存じでせう、今の足音を！』とSが力を入れて言つた。

『何んです、何の足音です！』とMが訊いた。

『あれです。あれが毎朝未決から既決に落ちる囚人です。いつも恰度今頃數名乃至多い日は十數名の者を一緒にして既決へ送るのです』

未決監から既決監へ落ちる足音！　あの足音の次ぎに二年なり三年なりの長い苦しい勞役や又無期懲役や死刑の執行が來る。Mは暗い恐しい運命の歩みのやうなその足音を最一度聞かうとしたけれど、最う其所からは方向もわからぬ遠い方へ行つてしまうて聞えなかつた。

『あゝして毎朝落ちるのです……私も明後日判決言渡ですから愈々控訴しない事になると、それから一週間目には落ちねばなりません』

Sは鼻をつまらせてゐる様だつた。

『兎に角去年の暮のあの寒い日に此の未決に來て今度は暑い七月に既決へ行くのです。愈々落ちるかと思ふと矢張り色々な事が思ひ出されて、未決の方がどんなに長く苦しくても好いやうな氣がします』

『そりやさうでせう。しかしそんなに心配したものでもありますまい』とMは慰める積りで、

『それにあなたはお身體も丈夫らしいですから……』

『身體は丈夫です。二年や三年の勞役位勤められぬ事もあ

りますまいが、刑期が終つて社會に出た曉はどうでせう。無論誰れも對手にしてくれるものはありますまいし、財産とても今申した通りですし、まア小供位が賴りですけれど、それも自分の父が監獄戻りでしたら餘り喜んでもくれますまいし……然う思ふと私はいつその事死んでしまひたいやうな氣がします。私はあの一監の四房にゐた青年の樣に何か不治の病氣があつて、落ちさへすれば再び生きて歸られぬものときまつた人の方がどんなに好いか知れぬと思ひます』

『そんな事はありませんよ。獄死が何になります。生きてさへ歸れば社會の地位や信用は恢復出來るじやありませんか』

『何んと言つても破廉耻罪ですからね……無事出監した

ら朝鮮か満洲にでも行かうかなア……』とSは獨言のやうに力なげに言つた。

『私だつてさうです。有罪ときまつたら矢張り破廉耻罪です。しかし私はそんなに社會が狹いものだとは考へません』とMが答へた。

Sは何かぢつと考へてゐたが、

『私はあなたに一つ御願ひがありますが……』と暫らくしてから言つた。

『何んです、何んです、どんな事でも私に出來る事なら致しますよ』

『何！何んでもないですが……兎に角私達ちはこれを機會にして友人にならうじやありませんか。あなたはまだ三十になるかならぬ前途有望のお方だし、私は最うこれで五十です。殊に有罪か無罪かわからぬあなたに、有罪ときまつた私がこんな事を申すのは失禮かも知れませんが、是非友人になつて下さい……婆婆に出ても此の壁の穴から話をした事をわすれずにゐて下さい』

『無論です、此の穴の事は決して忘れません』とMは感激した聲で答へた。

『私も根からの惡黨ではありません。此所に來てどうしてあんな馬鹿々々しい大膽な事をしたものかと自分で自分の氣がわからぬ位後悔してゐます』とSがつけ加へた。

その翌々日の自由散歩の時、

『愈々判決言渡が來ました……今はまだ七時半頃ですね、

それじやまだ一時間半ばかりある。丸時になると看守が來て裁判所へ連れて行くでせうが、私の運命は今日で決します。それから控訴は兄が昨日接見に來てくれまして色々談合の末ごんな事があつてもしない事に決めました。これには色色事情もありますが……兎に角さう言ふ風ですから一週間後には既決へ送られるでせうが、それ迄に最うお話しが出來るか出來ぬかわかりませんから申して置きますが、私が落ちる時何か合圖をしてあなたにお知らせしたいと思ひます。さうですね、ごんな合圖が好いでせう』とSは如何にも狼狽へながら言つて暫らく考へた後、

『斯うしませう、私が咳をわざとコン〳〵〳〵と三回やりませう。それを合圖にしますから、若し咳が聞えましたら、私が

既決監へ送られる時だと思うて下さい。兎に角長らく御厄介になりました。私はあなたがお隣に來て下さつてからごんなに氣が紛れたか知れません』

『私もさうです、私こそ色々御厄介になりました』

『それからあなたはお身體を大事にしないといけませんよ。これから先が隨分ですからね』

『ごうも有難う』とMが答へた。そして彼れも之が長い〳〵別れだと言ふ氣がしながら、既決監へ數日の後落ちねばならぬSの顏をぢつと穴から覗いた。ごうしてあんな大膽な詐欺を働いたかと疑はれる程人の好ささうなSの眼と眼の緣とが少し見えた許りであつたけれど、MにはSの如何にもおちつかぬおど〳〵した心の全體が見えるやうな氣がした。

自由散歩の時刻が終ると、一旦監房へ入れられて、暫らくし」てからSは裁判所へ送られた。その日は他の囚人よりもずつと早く午後一時頃歸つて來た。行つた時も歸つた時も足音と房の戸の音によつてMにはわかつた。歸つてからのSはMが怪しく思ふた程別に變つた模樣もなくその房もひつそりしてゐた。

MはどうかしてSの判決が聞きたかつた。無論Sの犯罪とMのそれとは比べものにならない。Sは五六千圓Mは僅か百圓足らずの詐欺だつたので、彼れは『自分とSとは大分違ふ』と幾度も心の中に繰返し乍ら全く別な物に考へたけれど尙Sの判決が自分にも當嵌まる樣な氣がしてならなかつた。此の未決監にゐる者は誰れも彼れも共通した運命を持たねばならぬ。Sには自分と全く同じ運命が、唯自分よりも一足先に來たに過ぎない、そして自分にも追附けそれと同じ運命が來るのだと考へられて、その恐しさに震へる心を抱いた。

翌日は雨だつたので散歩に出られず、いら〳〵する氣分を感じて蓆の上に坐り暮した。二日目は晴れたけれど此の日は何故かSの散歩が禁ぜられたので、Mは只一人さびし氣に房の周圍を幾回となくグル〳〵歩き廻つた。三日目もさうだつた。

二人は終に會へなかつた。そして七日の控訴期間の終つた次ぎの日の朝になるとMは『愈々今日だ』と考へ乍ら時々壁の穴から隣房を覗いて見たけれど、それは板壁の側になつてゐたので、房内にゐるSの姿は見えない。やがて未決を既決

へ送るべき時刻が來た。Mの房では看守が所持品の取片附けをしてゐるらしくカタン〳〵と言ふ音や、又何の話かわからぬけれど看守の聲に應じてSの答へる震へ聲が微かに屢々洩れた。間も無く看手とSの足音とが二つもつれながら監房の前から煉瓦壁の圍の入口の方へ向つた。とMはSの發した三つの作り咳を聞いた。

彼れは監房の中に逃げ込むやうに這入つて蓆の上にベタリと坐つた。そして激しき震へを全身に抱いた。

Sの足音は遠く既決監の方へ急いで、其日からMは又一人になつた。たとへ自由散歩の朝、壁の穴からSの名殘の空房を覗き見る事はあつても深い〳〵沈默を守らねばならぬ。淋しい長い暑い日が來た。Sは懲役三年六月に打たれた。

慰籍

—『蜘蛛』續篇—

一

今のMは、人通りもない町はづれの淋しい路傍にブッ倒れて何か切りにもがいたり或は又ウー〳〵と苦しさうに呻いたりしてゐる酔ひどれのやうに、惑亂して正しい理解力も常識も失うてゐた。彼れは自分が斯かる恐しい深い穴倉のやうな所に押し込まれた理由や、明るい廣いタッ〳〵とどんな大足でゞも歩かれる世界から此の狹苦しい一間四方の監房の中に來るまでの道順や經過を完全にハッキリ考へることすら出來なかつた。彼れの前には暑い長い苦しい日が明けても暮れても續いた。彼れは中の薄暗い、そしていくら破らうと

しても破れない堅い袋のやうな物を被つてゐて、その袋から出る事はどうしても出來なかつた。眼に見えぬ太い長い鎖の爲めに手足や腰のあたりを監房の荒い格子に繋ぎつけられてゐるやうな氣がして、時々眞暗い昏迷を感じた。眼は絶えず恐しい顏や姿をしてゐる運命を見つめながら、心は眞暗い穴倉の底を、西も東も知らぬ迷ひ兒のやうに當てもなく彼方此方さまよふた。

それは隣りの獨居監にゐた銀行券僞造行使のSが刑の確定と共に既決監へ送られてからの事であつた。彼れは朝の自由散歩が來ても今迄のやうに看守の眼を盜み〳〵慰めあふたり、勵ましあふたりする話對手がなくなつたので、最初は急に何所か遠い人氣のないシーンとした離れ島にでも來てゐるやうな寂しい長い飽き〳〵した思ひがしてゐたが、それが次第に彼れの心を喰つて行つて、今の彼れはそのあとに、殘つた喰ひ粕ばかりのやうな心になつてゐた。

Mは屢々隣房囚の居つた頃の事を思ひ出す。房と房とを、せきつてゐる高い厚い煉瓦壁の片隅に誰れが穿したとも知れぬ小さい穴があつて、二人はその穴の兩側に顏をすりつけて言葉を交した。それは毎日同じやうな慰めや勵ましにすぎなかつたけれど、散歩の時間が終つて各々監房に入れられてからぢつと蓆の上に坐つて夜の來るを待つその一日が、何んとなく氣輕く過された。降雨の日散歩が許されずそして話の交されぬ日は、二人とも言ひたい事や聞きたい事を胸一杯にもちながら、それがどうする事も出來ぬと言つたやうな、

いら〳〵しい遣瀬ない心が終日わだかまつた。

SとMとは何の關係も無い、只房と房とが隣接してゐると言ふに過ぎぬ偶然の事情から知合になつたのだけれど、二人は常に壁一重を隔て〳〵、凭れあふやうな心になつてゐた。いつも恐しい強い手で押へつけられながら、心と心は小さい壁の穴から往つたり來たりして、互に手を取りあうてゞもゐるかのやうに、慰めもし、慰められもした。

二人は屢々裁判所の手に擧げられてゐる證據物件や豫審廷に於ける申立てなどを語つて法律的な解釋を下しあふた。事件に關係のある行爲や物件に對しては十分安神の出來るやうな解釋を下して置かぬと、いつもおぢ〳〵してうなされ初める時のやうな心がした。自分自身の心に解釋を求めて

尙ほ安神が出來なくなると互に解釋を求めあふた。

『何！大丈夫ですよ。一寸も心配することはありません』

一人が斯う言ふと、他の一人は

『さうでせうか、大丈夫でせうか』と答へた。それは互に言ひあひ答へあふいつもかはらぬ問答であつた。

詐欺取財の被告人たるMは家宅捜索を受けた時檢事の手に押收された一通の手紙が有力なる證據物件となつて、スラスラと解決すべき事件を滯らせるものゝやうに考へられた。彼れは己れの眞直い心の歩みを信じてゐる。自分の心がそんな恐しい犯罪の方へ行つたとはどうしても考へられなかつたけれど、ともすればその押收された手紙の爲めに清い心が覆ひ隱されはすまいかとそればかりが氣になつた。自分

の行爲や申立てなどを一々切り放して善惡を考へたり、正不正を判じたり、或は又裁判官のやうな心になつて訊問したりしながら、不圖その手紙の上に思ひ至ると、急に行く手が暗くなつて、そこから堪へられぬおど〳〵しさが出て來た。手紙の事を考へるともう直ぐ傍らに恐しい運命が近づいてゐるやうな氣がした。そして彼れは幾度も、自分は迚も逃れられぬだらうと諦らめを強ゐるやうな溜息をついて、その恐しさ苦しさに堪へられなくなると、いつもSの心に解釋を求めに行つた。Sは何んでもない事のやうに言つてくれた。そんな物は罪を構成する程力強い證據ではないと言つてくれたけれど、Mは尙ほ心配であつた。いつまでも〳〵その手紙の近くに心が引寄せられてゐて惱まされた。そして果てはS

の解釋を好い加減の、信用の出來ないものゝやうに疑つた。

Mは Sに對して、

『あなたは然うおつしやるけれど、私はどうも不安心です。あの手紙さへなければ私は何んの引つ掛りもないですからね……あなたは私を安神させる爲めそんな解釋をして下さるのではないでせうね』と言つた。するとSは

『そんな事はありません。私は斷じてそんな物は證據にならぬと信じます』と答へた。

Mは Sが如何にも信ずる所のあるやうにキッパリ言ひ切つてくれると尙ほどこにか暗い心配が離れずにゐながらも、いつの間にか明るい方へ思ひ返す事が出來た。

それと同じ場合が Sにもあつた。Sは屢々

『私は迚も駄目です。おちるには相違ないですが、餘り長く打たれると溜りません。四五年も打たれるのではないでせうかね』と言つた。

Sは額面數千圓の銀行手形を僞造行使した。彼れの事件はその町の出來事としては重大なるものとして新聞にも報せられ、世評も一時は持ち切つてゐた位であるから、四五年位の懲役は當り前であつた——斯うMは考へたけれど、若しそれを明白に言へば、どんなにSが力を落すだらうと思ふと知らず〳〵遠慮して、

『そんな事はないでせう。いくら長くても二年以上と言ふ事はないと思ひます』

『二年迄だと執行猶豫がありますがね……』

『さうです。あなたなんか市會議員と言ふ肩書もあるし、無論初犯ですから十分改心を與へる餘地があります。私は矢張り懲役二年位で執行猶豫になるのだらうと思ひます』

Mは馬鹿々々しい、どうしてそんな事があるものかと考へながら斯う言ふと。

『さうでせうか。執行猶豫だと私はどんなでも奢ります』とSが答へた。

それはSに對して只氣休めを言つてやるに過ぎなかつたけれど、するとSの力の拔けてしまふたやうな青ざめた顏にいくらか安神した張りの現はれるのが壁の穴から覗き見られた。SもMの解釋をホンの慰めだと考へてゐたかも知れぬが、斯う罪の輕いやうに言はれると何んとなく嬉しさうで

あつた。

二人ともお互の慰めにたよらずに自分自身に反省熟考してキマリをつけねばならなかつたけれど、自分獨りで考へに耽つてゐるといつも恐しい運命の方へ許り歩いて行くので、その恐しさの爲め頼りにならぬと知つてゐるお互の慰め合ひに心を凭れさしてゐた。信ずべからざる事も信せぬ苦しさ悲しさに、無理に信じやうとしてゐた。Mはさう言ふ自分自身や乃至Sの姿を何んと言ふ哀れな心だらうと思ふた。

そのSは懲役三年半の宣告を受けて既決監へ送られた。その事を或る看守から聞いた時、Mは案外罪の輕かつた事を思ふと共に、又一面にはSに對して何んだかすまぬ事をしたやうに感じた。彼れは好い加減の事を言つてSを慰めた事

が全くSを欺いてゐたやうな氣がして心を咎めた。

自由散歩の時Mはいつも煉瓦壁の穴からSのゐた隣房を覗いて見た。何の音もせぬ人氣のない、さびしい空房がシーンと鳴つてゐた。

斯うして一人になつたMは己れの監房の周圍を足に力を入れてトッ〳〵と歩いたが、次第に足が緩んできて、いつしかその足音も寂し氣になる——Mは自分自身の足音が次第に消えてしまふやうな感じがして、心細さ、淋しさがひし〳〵と迫つた。監房の屋根の方へ枝を廣げた山櫨の青い繁りをぢつと見あげた儘ポカンと佇んでゐる事もあれば、又赤い煉瓦壁へ身體を躙り寄せて之れと言ふ考へも持たずボンヤリ煉瓦の面を見つめてゐる事もあつた。彼れはもう何の慰めも勵

ましも得られない寂しいポッチリした自分獨りの心を抱いて、今後どうなるかわからない、又いつ解決がつくかそれも知れない茫漠たる薄氣味惡い運命の前に立つた。

午前六時頃から九時頃迄三時間許りの自由散歩も有耶無耶に過して、愈々監房の中に入らねばならぬ時分になると、幾度も深い溜息を洩した。看守は家畜を小舍に追込む番人のやうに半ばせき立てながらMを房に入れると厚い戸をしめてピシンと錠を下す。Mはその音をうす暗い震へてゐるやうな心の底に聞いて、稍々黑く汚れた堅い蓆の上に、表の格子の方を向いてキチンと坐つた。そして蒸暑い身體中のモヤモヤするやうな八月の長い一日が來ると、自分の遣る瀨なさが幾度も〳〵心へ詰め込んで來る。彼れは未だ曾つて見た

事もなければ想像した事もない自分自分の姿を見廻しては、これが本當の自分だらうかと怪しまずにはゐられない時さへあつた。

二

Mは入監した時訊問室で、携へてゐた懷中時計を押收された。監房は何處に行つても時計は無し、看守部屋や事務室などにある時計は、房から餘り距つてゐるので、その音は聞えなかつた。Mは此の時刻を知るよすがのないのがどんなに頼り無く感ぜられたか知れない。

けれどもそれが入監してから七日となり十日となるにつ

れて、他の囚人の如く、房に射す日光によつて凡その時刻が判せられるやうになつた。監房は表と裏とが荒い松の格子窓で、そして西向きだつたので、午前の間は裏口から、又午後は表から太陽の光線がはいつて來た。太陽が裏から表に廻つてしまふ迄には、左右が板壁だつたので、その左側の壁に遮られて日光の照り込まぬ時があつた。その代り房外の白い砂の敷いてある地面や赤い煉瓦壁の面などには、どこから來るとも知れぬ光の波が映つてゐた。裏口の日光が廻轉して表口からちら〳〵と房内を覗き込むやうになると、それは午後の一時頃であつた。Mは房内の蓆の片隅に映つた日光が次第に幅を押し擴げて午後の四時頃房内一面になつてしまふのを、時計の針の右から左へ廻轉する、あの殆んど眼に見えぬか

すかな歩みに對していもゐるかのやうに心を止めて見詰めた。

夏の雲が所々に大きな塊をなして横ぎる日は、太陽の光線がそれに遮られて監房へはさし込まず、煉瓦壁の圍ひの外の青い山巒の繁りや、稍々遠く距つた屋根ばかり見える既決監や、或は既決監と未決監との間の廣場に只一棟ぽつちりと建てられてある暗室監房の白壁などに映つた。それは雲の裏側から反射せられ或は又辷り抜けて來る光線であつた。その光線は雲の色の異るにつれて濃淡が出來、又雲の面積の大小によつて意外な所に影りを飛ばした。未だ曾つて射してゐるのを見た事も無いやうな所にテラ〳〵と輝く熱い光の蕩めきを見る日もあつた。さういふ日は時刻を判じる目標

がつかぬので、Mは今が何時頃とも判らない心細さをちつと堪へて蓆の上に坐し、そして太陽の歩みと雲の移動との爲め自然に出來て來る目標を待つた。雲がぢつと粘りついたやうに動かなかつたり或は太陽と同じ方向へ進んで行つたりすると容易にその目標が得られなかつた。

空一面が終日打ち曇つた日は到底時刻を知るたよりが無かつた。彼れは誰れか來て太陽の附近にある雲を押し退けて呉れゝば好いと強請むやうな心になつて空を見つめてゐた。寂しさ頼りなさ心細さが空から下りて來て心に一杯つまつた。Mは幾度も〳〵太息をついた。

と言つて、空に一點の雲の影りも無いギラ〳〵する日は暑くてたまらなかつた。Mは房の一方から段々に廣がる日の光を眺めながら追はれるやうに他の片側へ身體を躍り寄せて避けた。日光が部屋一面になるともう何所にも逃げ場がなくなつて焼けくそ的にその日光にジリ〳〵照らされながら坐つた。風の無い、あつても高い煉瓦壁に遮られて房内に吹き入らぬ日はその日光がMの身體を中心にして淀を作つた。Mは身體中からジり〳〵と汗が流れた。膝の上に置いた手と手を揉み合せると掌や指の間がぬる〳〵した。傍らの手拭で拭ひ取つても暫らくすると叉毛穴から滲み出た。手の甲をぢつと見つめてゐると無數の小さい毛穴の底が薄氣味悪く輝き出して、やがて汗が一面に吹き出た。着衣の下では胸の所から腹の方へ水落の窪みを通つて流れる汗の雫が恰度身體に小さい虫でも這うてゐるやうな厭やな感じが

した。組合せた足と足とは皮膚が粘りついて離れなくなるのではないかと感せられた。

獨居監には滅多に看守は來ない。午前の十一時頃看守長が監房の巡視に來て、房の外から薄暗い中を覗き込んで、

『暑いだらうね』と言ふ。それは毎日おきまりの挨拶であつた。するとMは座つた儘一寸頭を傾けて敬禮をなし、そして頭を上げると共に下の方から看守長の顔を仰ぎ見るやうにして、

『えゝ午前はまア好いですけれど午後は全く溜りません』

『さうだらう、風が通はぬから一層暑いだらう』

看守長は日にやけた黑い顔ににや〳〵答ひを浮べて、

『しかし身體には障りはないだらうね？』

『えゝどこも……』

會話はこれだけである。此の短い會話の間に看守長は聞くだけの事を聞き巡視の役目もすましたと言ふ風に、やがて熱い燒け爛れたやうな地面の砂を蹈んで次ぎの房へ行つてしまふ。

彼れはどの房に行つても暑いだらうとか、身體に惡い所は無いかとかMに聞いたと同じ事を聞く。

滅多に人の來ぬ獨居監では此の看守長の來るのが氣紛らしになつてゐた。格子の隙間から覗き見られる限りの物はその長い一日に幾度となく見つくした後なので、房外の煉瓦壁や山櫨の繁りや既決監の屋根やさういふものは見飽いてしまうて何か異つた人の顔が見たく人の聲が聞きたい。出

來るならば大きな聲を出して話がして見たい。いつも〳〵深い沈默を守つてゐるので、自分はもう次第に大きな聲が出なくなるのではなからうかと、こんな莫迦々々しい事迄が考へられる程であつた。それで看守長のお役目的な、冷やかな挨拶も、檻の中の動物を外から覗き見る見物人のやうに、そしてお前は重い罪人だから神妙にしてゐなければならぬぞと言つて居るやうな態度も何となくなつかしく考へられた。

毎日看守長の巡視する時分になると切りにその足音の近づくのが待たれた。看守長が行つてしまふと最う正午の飯迄は誰れも來なかつた。

看守長の外にその房に來る看守は、一日置きに交代する二人の部長と、御飯の時に來る赤いふとつた顏の、灰色の長い口髯を生した看守だけであつた。獨居監は部長の直接監視に屬してゐたので、他の房のやうに色々の看守は來なかつた。

夜は他の雜居監を巡視する色々の看守が角燈を下げて、幾度も〳〵草履の音を盜みながら監房を廻つては行き、又來て廻つた。

それらの看守は次第に顏馴染になつた。殊に一週間に一度位宛來る第一課長には非常に親しみ易いやうな心がもたれた。

課長は春のスラリとした、色の白い、優しいゼントルマンライクの人であつた。言葉も丁寧で又何の隔ても無さうに友人に對するやうな言ひ振りをした。

『どうです。中々暑いですね。房内は隨分暑いでせう』

課長はMの房の前に立つと斯う言つた。Mはそれが何んだか自分を慰めて呉れるやうな言葉に感せられた。

『え、午後は隨分暑う御座いますが』と半は伏目になつて何事か哀訴する聲で答へると、

『君もまだ豫審はすまぬのでせう』

『えゝ、入監つてから一度も呼び出されないのです。どうして斯んなに長引くのでせう？』

『恰度夏休みですからね。七月十日から九月十日迄は裁判所が平生の半分しか事務をとらないし、それに判事が交代で休む事になつてゐますからね。豫審の長引くのは御氣の毒だけれど如何も仕樣がありませんね』

『しかし裁判所は夏休みでも犯罪は休みはないでせう』

Mは小供が大人にあやかるやうに斯んな輕い皮肉を言つた。

『だから吾々監獄の方でも罪人が澤山たまつて困るんです。吾々の方も夏休はありませんからね』

『裁判所の方は夏休みか知りませんけれど、被告の方では今日か明日かと呼び出されるを待つてゐるのです。豫審がすめば兎に角型だけはつきますから……』

『そんなに急いではいけません。氣を長く持つてゐないと駄目です』

『しかしいくら氣を長く持てと言はれましてもさうは行きません』とMが何んだか甘へるやうに言ふと、

『君なんかまだ入監つてから二週間位のものでせう。中に

は入監つたきり三月も四月も呼出されぬのがあるのです。それに比べると何んでもないじやありませんか』

『そりやさうですけれど私の事件は他人の事件とは違ひます。誰れが見ても直ぐ黒白のつくやうな事件ですもの』

Mはいくらか不平のやうに言つた。

『さうですね。君の事件は僕は餘り詳しくは知らぬけれど簡單は簡單らしいけれどね』

課長はMの顔に、先天的に深い思ひやりの秘んでゐさうな黒い眼を注いで、シゲ〳〵と見つめながら、

『兎に角氣を大きく長くして居らぬといけません。身體が何より大切ですからね』

『えゝ……』とMは次第にハッキリした返事の出來ぬやうに胸が一杯になつて來る。何んと言ふ親切な優しい人だらうと思ふと眼をあげて課長の顔を見ることも出來ず、いつしか涙が滲み出た。そして課長が去つてしまふと額を格子に押し當てゝ女々しくも泣いた。一寸した同情のある言葉をかけられても張りつめたギシ〳〵したやうな心が緩んで、拭うても〳〵流れ止まぬ涙となつた。涙のはげしく零れると共に彼れは額を次第に強く格子に押し當てる。格子の角の痕が額の肉に凹んでついた。

暫らくするとMは又以前の寂しいけれども緊張した油斷のない心に歸つた。斯うして彼れは朝からは正午を待ち、正午が過ぎると夜の來るを待つた。

監房は明治二十二年の建築で、大分古かつたけれど松材の

節々からは脂が滲み出た。それは非常に蒸し暑い日が幾日も續いた末の事である。脂は五日も六日も經つ間に次第にその量を增して、しまひには赤い小さな球となつた。そして柱を下へ〳〵と流れるのもあれば又天井からブラ下つて今にも落ちさうになるのもあつた。何十年と言ふ昔に切り倒された松の木の靈魂が尙死なずにゐて、斯う言ふ赤い球となつて現はれるかも知れない。

天井の脂の球を見上げ〳〵しては、いつそれが落ちるだらうかと考へる事があつた。柱の脂を指先きに取つてその粘々するのを揉みつぶしたり或は柱に抹り廣げてしまふたりした。或る日Mは彼方此方の節々から滲み出た脂を集めて來て、飴細工でもするかのやうに、指先きで練つて小さい鳥や

蛇の形や或は自分の名の頭文字なるMの字を拵へた。こんな手遊でも房内の長い苦しい一日を暮すには氣紛らしであつた。まるで小供のやうだ！と自分自身のすることを考へて見るとさう言ふ果敢ない遊びに仍つていも心を慰さめねばならぬ今の姿が悲しくなつて覺えずホロリとするのであつた。

床の低い房内へは蟻が幾つも這入つて來た。Mはその蟻と屢々遊んだ。飯の時に副食物の中から小さい肉片を取つて置く。蟻は牛肉よりも鷄肉の方を好んだ。ひよろり〳〵と餌を捜しに來る蟻の前にその肉片を置くと、彼の小動物は先づその匂ひを嗅ぎ、つぎにそれを一周して自分一人で引いて行けぬものだと見ると、直ちに己れの巢の方へ應援を求め

に行く。蟻は床下へ眞逆様に轉げ落ちるやうにして一生懸命に疾走する。そして間もなくその蟻が道案内となつて多數の同族を引きつれて來る。

肉片を寄つて集つて引き摺つて行くのを大きな指先きで色々に邪魔をする事もあつたが、尙一層ぢらして遣るには、その肉片の位地をそつと變じて置く事であつた。するとゾロゾロと列をなして來た蟻の群れは目的の餌が見つからぬので忽ち狼狽へ初める。數十疋の蟻が手分けして餌の在場所を間違へてゐるのではないかとその附近を彼方此方捜して見て、終に發見しないと力扱けのしたやうに又列をなして巢の方へ歸つてしまふ。但し最初餌を發見した蟻らしいのは容易に去らうとせず、いつ迄も未練氣に肉片のあつた場所を

嗅いでゐる。無い筈はないと言つたやうに熱心にきよろきよろと四邊を見廻す。さう言ふ時突然肉片を出して遣ると蟻はそれを天から降つて來たやうに感じて暫らくは油斷せず見つめてゐて、漸て又同族を呼びに行く。

Mは屢々蟻と蟻とに喧嘩をさした。それは斯うである——その監房には數組の蟻が來た。彼等は種類を異にし又巢を異にしてゐた。若し他の巢の蟻に出會すと互ひに嗅ぎ合ひ、時には手先きで揉み合ふた後一方が路を避けるか、さも無くば双方とも元來た方へ引き返す。かう言ふ種族の異つた二疋の蟻を見出した時、肉片を一片づゝその前に置いてやると、蟻は各々自分獨りの力で發見したかのやうに得意になつて應援を求めに行き、やがて數十數百の同族を引きつれて各

々の巣から長い〳〵うねりつた列をなして來てその肉片に群る。肉片には無數の蟻が獅噛みつく。と折を見て急に一方の肉片を他の肉片の傍にもつて行くと、忽ち異つた二種族が一緒になるので激しい喧嘩が始まる。蟻と蟻は噛み合ふ。動物學の知識のないMにはその名稱も分らぬけれど頭の大い、そして頭一杯が口になつてゐるやうな大きな歯を持つてゐる蟻——これは一種族の中に十數疋はゐるらしい——が盛んに對手を噛み殺す。かなはじと見た一方は軈てちりぢりになつて退却する。

殺された蟻は多くは頸の附け目が噛み切られて首と胴とが別々になつてゐる。首はごろりと小さい點をなして横はり、又胴はくるんと曲つた儘棄てられてゐる。退却する時同

族の死骸を咬へて運ぶのもあるけれど、戰の濟んだ後には斯かる死骸が幾つも〳〵轉がつてゐる。それらの死骸を見ると、Mは何んと言ふ無慙な事をさせるものだらうと自分自身を責める事があつた。しかし之れも獄中の日を紛らすには好い遊びてある。プーッと吹くと小さい蟻の死骸は塵埃のやうに飛んで、何所へ行つたか見えなくなる。哀れなる小動物よ！

Mは蟻の戰爭にも飽いて來た。そしていつも〳〵自分の前に迫つてゐる大きな運命の姿がさま〴〵の形に見えた。彼れは無罪を信じてゐたが、と又彼れは、たとへ己れに罪を構成するやうな行爲がなかつたにせよ、どういふ譯から有罪になるかも知れぬと考へた。未決監にゐる者は百人が殆んど

百人その歩みを既決監の方へ向けねばならない。既決と未決との境界はホンの一足である。人間が悪い事をすると、しないとはホンの一刹那一足で有るが如く、そしてその一刹那一足は同時に永久であり無限である。豫審から公判へ、それは未決監から既決監へ、長い〳〵苦しみへ入るの道である。

Mは自分の運命を考へるごとに検事の手に押收された手紙を思出して心配でならなかつた。解釋次第によつては如何な恐しい判決文となる事も出來る。疑はれても仕方がない。彼れはかうして此の自分が見す〳〵冤罪に落ちるかと思ふともうたまらなくて、何かしつかりした物にでも獅噛みついてゐなければならぬやうに感じた。

Mはさう言ふ追ひつめられるやうな心になるといつもSの事を思ひ出した。自分の行く手が眞暗くなると、たとへ出鱈目でも好い、何等かの慰めを求めずには居られなかつた。

MはSの姿をさま〴〵に描いた——

既決監へ落ちると共に直ぐ褐色の獄衣を着せられる。上衣は胴切れのやうに尻の少し下迄來て、別にズボンを穿いてゐる。ズボンも帶も同じ褐色である。そして晝はいつも草鞋を穿いて看守のつけ〳〵しく働いてゐる。

『もし落ちなすつたらあなたは何をなさるのです』と、或日壁の穴からSに聞いた。Sは恐しいものでも思ひ出したやうに、

『さうですね、何をしたら好いでせうね？』

『仕事はこちらから希望しても好いのでせう』

『それは好いでせう。我々に大工や鍛冶屋は出來ませんからね』

『監獄の仕事は何が一番樂でせう』

『樂なものはありませんさ。どうせ地獄ですからね。しかし網をすくか、炊事をするか、或は又醫者の手傳ひでもするか、こんな事が比較的樂だらうと思ひます』

『毎日々々網ばかりすいてゐるのも退屈でせう。三年も四年も同じ所にぢつと座つて同じ仕事をせられてゐては辿もやり切れませんよ』

『そりやさうでせう……ですから私は炊事か醫者の手傳ひかを願つて見やうと思ひます。兎に角同じ所にぢつとし

て同じ仕事ばかりしてゐるのは苦しくて溜りますまいが、炊夫や醫者の方だとさま〴〵の人にも會へますし彼方此方へもゆかれますから、自然氣が紛れるだらうと思ひます』

SとMとは斯んな話をした事があつた。が今のMはSがどんな仕事をしてゐるか知る方法もない。

何をしてゐるのだらう？Mは斯う思ひながら時々煉瓦壁の圍の外で何か働いてゐる既決囚の聲がするとそれがSではなからうかと耳をそば立てた。ヂャラン〳〵と引きずる鎖の音を聞いても、直ぐそれがSで、Sの足には長い重い鎖がつけられてゐるやうな氣がした。

さま〴〵の形や姿にSを描くとMは最うその淺間しい姿が自分も一度はさうならねばならぬものゝやうに考へられ

た。自分に來るべき運命もSの今の姿と同じもので、Sが恰度自分の運命の象徴であるかのやうな心がして言ひ知れぬ恐しさに身震ひがした。いやだ、いやだ、自分はどんな事があつてもそんな姿にはならない。いくら毆られても——たとへ殺されるやうな目に會うても赤い獄衣はつけない。もし無理に獄衣を着せやうとする者があつたら、自分はそれを引き裂いてやる。斯う堅く心の中では言ひ放ちながら、いつの間にか身體の一部が褐色の獄衣をつけさせられて、暫らくするといくらあせりもがいてもどうする事も出來ない、全身獄衣に包まれてゐるやうな氣がした。

Mは若し既決へ送られる樣になつたら、その時は監房の格子戸にしつかと獅噛みついてゐて、どんな强烈な暴力が來て

働いても此の房から出まいと考へた。彼れにとつては監房が唯一の避難所のやうに感ぜられる。さう言ふ時の來たかのやうに覺えず兩手に力を入れて格子をしつかと握る時があつた。

と暫らくすると又別な心になつて、今迄の眼の前に描いてゐた恐しい幻影をあわてゝ抹り消す。何んだ馬鹿々々しい、自分がどうしてそんな有罪になるものか。今に自分の眞直い心が判つて裁判所や警察は自分に對して如何にも大犯人のやうに大袈裟な檢擧をしたり、嚴重過ぎる取調をした事を輕擧であつたと氣づくであらう——かう考へると忽ちカラッとした心になつた。

三

監房の長い飽き〳〵した日は三度の飯を食べるといふ事も、毎日おなじ日課のやうに繰返へされるのに過ぎなかつたけれども、矢張り氣紛らしになつてゐた。Mは三食共おなじ會社の者の差し入れてくれた辨當を食べた。辨當は黒い漆塗りの眞四角な二重の箱で、表の方は角々の漆が剝げて汚ない木地を現はしてゐたけれど、中は眞赤な燃えるやうな色をしてゐた。

辨當を持ち運ぶのは多くは小使であつたが、時折既決囚の炊夫が、その後に嚴めしい看守の見張りを受けながら持つて來た。五器口から差し入れる辨當を、兩手を出して受取る時には、自分自身の姿が恰度外から餌食を與へられてる檻の中の獸のやうな氣がして、手の先きが罠に罹つた野鼠の小さい身體のやうにブル〳〵と震へた。Mはその時決して顏をあげ得なかつた。何んだかひどく侮辱されてゐるやうな氣がした。

辨當を受取ると次に房内備へ附けの土瓶を五器口の前に置いて、炊夫の差出す竹の樋のついた桶から湯を注いで貰ふ。竹の樋は大きな穴がぽかんと穿げてゐた。そして土瓶の底にコボ〳〵と音がして白い湯氣が五器口を出たり入つたりした。湯を貰ふと、炊夫の後に絶えずついてゐて瞬きもせず鋭い目で見てゐる看守が、『喫飯！』と命令する。Mは看守の足

音と炊夫の足音とがもつれながら煉瓦壁の園の外へ出てしまふと漸く顔をあげて、その黒い辨當を手に抱へてムクリムクリ食べ初める。その姿が殆んど自分自身だとは思へぬ程哀れに、そして淺間しく映つた。

飯と飯との間は待遠くてたまなかつたけれど、その癖腹は少しも減つてゐない。何か堅いものゝわだかまつてゐるやうな腹具合が續いてゐて、食べる御飯が後から〳〵と入つて行つて溜るせいか、腹ばかりが身體中でいつも一番重苦しい所のやうな感じを與へた。

飯を食べてしまふと辨當の殻は五器口の外に出して置く。ものゝ一時間もしてから小使が取りに來た。

それは或る日の夕飯の時であつた。Mはいつもの如く既

決囚の差入れる辨當を輕くうなだれたまゝ受取らうとすると、辨當は自分の手に渡されて五器口から中へ引込む許りになつてゐるのに、既決囚が手を放してくれぬのを感じた。二重の辨當が狹い五器口の所で搖すれて上の段が落ちさうだつた。

『Mさん！』

Mは自分の名を呼ぶ低いかすれた聲を聞いた。それが誰れの發した聲であるかを考へる餘裕もなくMはハッとしてうなだれた頭をあげると、

『おう！』とかう覺えず叫ばうとしたが、その横に看守がむづかしい顔をして立つてゐるのに氣附いて聲を呑んだ。彼れは辨當を受取つた自分の手を内へ引くことも忘れて、既決囚

の顔をぢつと見つめた。既決囚もMの顔を見つめながら、にやりと頬笑んだ。

『早く取らんか！』

看守が斯う叱つた。

『ハッ！』とMは身體を一氣に引きしめられた時のやうに答へて辨當を受取つた。

『喫飯！』と叫んだ看守の命令も聞えない。身體中の血が一時に波立つて血管がはち切れさうになるやうだつた。彼れの胸はドキ〳〵と動悸がして、ボーとした眼で、看守に追はれて行く既決囚の後姿を見送つた。二人の足音が園の外に出ると幾度も深い溜息をついた。

そしてその溜息が全身の涙を絞り出すかのやうに、しまひには眼が一杯涙になつてゐた。

それはSであつた。隣房にゐたあの忘れられぬSであつた。懲役三年半に打たれてトボ〳〵と既決監の方へ引かれて行つたうすぐらい顔のSであつた。

夕飯は六時半なので、西の空が次第に赤い色を滲み出して來る。夕日は赤い雲の重なりを下へ〳〵とおりて行つて山檻の青い繁りの隙間から眼も當てられぬやうなギラ〳〵する大きな球の一部を見せた。赤い輝く球を見つめてゐると動物が息でもしてゐるやうに、その代赭色の表面が脹れたり縮んだりする。夕雲の赤さは次第に濃くなつて行くが、それと同時に廣さが縮小して何所からともなくスーと薄く灰色がゝつて來る。悲しい灰色の雲が沈む太陽を追ひまくるや

うにしながらジリ〳〵と己れの廣がりをひろげて行く。山
檻の繁りは日光の影る所と灰色の雲の映る所とが出來て斑
になる。一塊の綠色に所々汚點のついたやうに見えた。
監獄にお馴染の雀も町の方から二三羽づゝ歸つて來る。
ずつと先きに歸つて來た二三羽の雀は歸りの早かつたのを
誇るかのやうに、吾々人間には何の事だかわからないが、嬉し
さうに何か切りに話をしながら、山檻の葉に止まると、その重
さに葉がフラ〳〵と搖れて雀の圓い身體は葉から地上へお
ちやうとするけれど、二三尺位の所で姿勢を恢復して又上へ
飛上る。それは雀が面白がつてワザとしてゐる惡戲のやう
にも思へる。
大工や活版屋や鍛冶屋や細工物や、あらゆる勞働をしてゐ

る既決囚が各々の工場から廣場へ引き出されて、長い一列を
いくつも作つて人員點呼を受ける。一二三……と次ぎか
ら次へ番號を送る囚人の聲——黄色い聲や、荒い太い聲や、或
は又病人のやうな力氣のない聲や、大小高低の聲が連なつて、
時には最後の番號が四十五だとか五十三だとか言ふ數を叫
ぶ事もある。既決監に新しく入る者や滿期出獄する者の一
日として絶えた事の無い現在囚の數はいつも變つてゐた。
その言ふ聲の連りはいくつもある。そして各々の連りの最
後の聲の叫ぶ番號を合計すれば其所に現在囚の數が判明す
る。Mは最初はさう言ふ勘定に興味をもつてゐたけれど、聲
の連なりと連なりとが混線して完全に全部の數を知る事は
出來なかつた。その監獄には既決囚が約五百許りゐた。

看守が聲の中を右往左往すると見えて、靴の音と洋刀の音とが混つて聞える。時々看守が『何號何を見てゐる』とか『しつかりせぬか』とか叱り飛ばす。ボンヤリ脇見をしてゐたり或は姿勢を崩したりしてゐると激しく叱かられる。中には頬面(ほっぺた)をひどく毆られる者や突き飛ばされてヨロ〳〵と後へのめり乍ら倒れさうになる囚人もゐる。彼等囚人には犬ころ程の力も無い。踏みしめた足が、醉ひどれのやうに踉めくのである。

人員檢査が終ると各々の監房の戸が開かれて順々にその中に押しこまれる。物狂はしい齒噛みをするやうな大きな鐵製の錠の下りる音が監房のあちらこちらから響く。やがて又シーンとした死んだやうな深い沈默が各々の監房に來

て何一つ話聲もしない。

その恐しい、各々の囚人の震へてゐる爲めに衣服と衣服とがすれあふ音や足につけた鎖の音などの騷ぎの間に、夕日は段々沈んで太陽が深い眠りに入る。そしてその後には帶のやうに長い夕燒雲や血の滴りのやうな夕映の淀んだ一片やらが悲しげに殘つてゐる。それも次第に灰色の雲から光を吸ひとられていつの間にか薄暗い影になつてしまふ。監房の壁にも暗い夜の色が映つて來る。

その忙しさうな、けれども又深い地の底へでも誘はれて行くやうなわびしさを眺めながら、多くの囚人はムクリ〳〵夕飯を食べる。

『Sだ！Sだ！』とMは今見た褐色の囚衣をつけたSの姿と、

ちつと自分を見つめながら何か言ひたさうだけれども看守の恐しさに言ひ得ずして只ニッと笑つたその頬笑みとを眼の前に描いた。彼れは胸の動悸は次第に鎮まつたけれども御飯を食べやうとはしなかつた。

何んといふ悲しい姿であらう。Sの獄衣は多くの囚人の着古したそのものだと見えて、その褐色が褪せうすらいでゐた。肩のあたりにダラリと下つたひだが出來てゐた。そして彼れは素足に土のついた儘の重さうな草鞋をはいてゐた。

看守に追はれてイソ〳〵と煉瓦壁の方へ出てしまふと最う足音は聞えない。自分の眼の前から一人の人が立ち去つたと言ふ事は、それが知己にしろ、又まるで知らぬ人にしろ、その跡に何等かの影を殘さねばならない。Mは尚半ば亡喪し

たやうな心になつてSの後姿を追ふた。Sは既決監の方へ歸つたらしい。

三年半の懲役！Sはまだ落ちてから十日許りにしかならぬけれども、その僅かな間に、以前とはまるで異つた姿になつてゐた。隣房にゐた頃のSは差入れの着物をつけ、差入れの辨當を食べてゐたが、今はもうあの薄汚い色の褪けた獄衣を着て、食事も引割の麥と芋とを混せつかへしたボロ〳〵の監食である。斯ふいふ風にMはどこ迄も行ける所までSの事を考へて行つた。暫らくすると彼れの眼はもう乾いて、半ばつめたい心をもつやうになつてゐた。

心の中でSの行く手を追うてゐると、いつの間にか彼れ自身も深い暗い穴倉の樣な所へ入つて行つた。と彼れは自分

自身の事が激しいうねりをもつて思ひ返された。自分もあんな姿になるのではなからうかと思うて覺えず ゾッとした。

一度摑んだが最後、散々弄んで、そして飽いてしまふ迄は放さうとしない黑い運命の手が眼の前に見え初める。その手が自分の帶の所をしつかと握つて長い鎖に繋がうとする。

彼れは終に箸をとらなかつた。

やがて辨當の空殼を取りに來る足音がするとMの心は躍つた。若しそれがSであつたら何んと言つて話をしやうとその足音を待つた。何物か自分の胸を毆ぐりに來るかのやうに足音の近づくと共に動悸が次第に高まつた。

けれどもそれは小使であつた。Mは當てが外れてぐつたりしたやうに、食べかけもしない重い辨當を五器口から出し

て力なささうに小使に渡した。

『あなたは未だ食べてゐないのですか』

小使が辨當の重いのを怪しんで斯う言つた。

『食べてゐません。食べられないのです！』

『じやもう好いのですか』

『好いですとも、持つて行つて下さい』

『さうですか。何んならまだ少しは置いてゐてもゐいですが……』

Mがしかめた顏を輕く振り乍ら言ふと小使は不審さうにその顏をジロリ〳〵と眺めた後辨當を抱へて去つた。

あたりはもう暗くなつて、雀の群れも騷ぎを止めた。彼等が少しの風位には搖れさうにもしない木の枝を探して、それ

に止まつてすや〳〵と眠つてゐる靜かな山櫨の繁りの下には薄黄色い電燈が所々にしよんぼり點つてゐた。

房内は次第に暗くなつたので、彼れは電燈の光のとゞく表の格子の方へ寄れるだけ躙り寄つて、尙の事を考へた。

『矢張り炊夫になつたと見える。あれが最初からSの希望だつたのだ！』

斯うMは心の中に獨言いた。と次ぎの刹那、

『炊夫なら時々來るだらう。或は話をする機會があるかも知れぬ』と殆んどそれは機械的に考へた。そして何か別の新しい氣紛らしが出來るやうな氣がした。キラ〳〵と光るやうな慰めが彼れの薄暗い心の中に訪ねて來てくれるやうに感せられた。

赤き日

鳴らぬ笛

机のひきだしにありし鳴らぬ笛、
銀のやゝ錆びたる鳴らぬ笛。

その笛をくちびるにあつれば
息のみとほりて鳴らず、
かなしき心が管のなかに殘れり。

管のなかをのぞき見れば、
殘れるその心は見えず。

されば更に強く息を吹く、
息は暴風(あらし)のごとく吹きぬけて
えひごれのごとき聲をいだす——

見えざる心が
笛のなかにかなしげに殘りて
えひごれのごとき聲を出す。

笛は鳴らず、
わが心によく似し
銀のやゝさびたる笛。

笛をふたゝび机の抽出に入れて
かなしき心を以前(もと)のごとく安置す。

眼

不幸の指ざす方に
死せる木立があり。

そのふかい木立の奥に、
外へ出でざる鴟梟が
くらい心をいだきて棲み、
その數が年々に殖えて行く。

不幸の指ざす方へ

旅の老爺はいそぎゆきて死にたり。

さまよへる心が路を失ひて
眼をあけしまゝ野倒れ死にたり。

その眼はいつ迄もとぢず、
腐爛しさりても閉ぢず。

いつまでも死のくらい木立に
ともせる灯のごとく殘れり——

さびしげに何かみつめて

ちつとうごかず殘れり。

柳の下

柳の下を通れば
そのたれし長き綠の葉に
そつとすがる心。

柳の下をとほれば
そよ風の吹きくるけはひに
わが心、左右にゆらぐ。

柳の下をとほれば

何か追ひくるものあるやうに
やゝおちつかぬ心となれり。

われとも思へず、
他人(ひと)の事にもあらず、
たゞすこしおちつかぬ心となれり。

流るゝ砂

白き水の上をのぞき見れば
小さき渚に心が輕く浮べり。

うかべる心は水の上を
ふわりふわりながれて行く。

しづかなる廣き水の面(おもて)に
張りつめし綠の色が浮きあがりて
ひかる小波(さゞなみ)。

水の底はふるへうごけり、
ながるゝ砂の
くる〳〵と廻るが透いて見ゆ。

生物によく似し砂は
白き水の底を下へ下へ
追はれるやうに遠き川下へ。

それをぢつと見つめて居れば
かなしくなりし水の上の心。

何となくかなしくなれり、
何となくおそろしくもなりたり。

芽

ふかき地の底のくらがりから
此の世にいでし青き草の芽。

うまれんとする胎兒が
腹の中をうごくやうに
地の底がいとかすかにふるふ。

その地の底からこつそり
のぞくやうにいでし青き芽。

綠色の心をすこしあらはし
おど〳〵しながら次第にふとりて
つひに此の世のものとなりし青き芽。

あをき芽は間者のやうに
ふかき地の底の秘密を
そのまきし葉の中に握りて來れり——

誰れも知らぬ地の底の働きを
吾等の心に語らんときたれり。

搖るゝ階段

階下の室のともし火は消えたり、
そのくらい室へ
階段をしづかに心が下る。

階下の室はせまく暗し、
その穴ぐらのごとき室へ下れば
階段が心のおもさにふるへゆらぐ。

階段の下方はくらやみとなりて見えず、

下へおりる心が
ゆきまごひて止まる。

一足ごとにくらい室へ、
死のふかい室へ
おりてゆく暗い階段。

何かしらずその階下の室に
蜘蛛のごとくぢつと這ひて
おりてくる心を待てるものあり、

階段はキイ〳〵と鳴りて搖ぎ

死の室を訪ぬる心はふるふ。

かなしき歩みを下へ、下へ、
階下の室の何の音もきこえず
たゞ死せる心がシーンと鳴り響く。

小供の頃

小供の頃は葬式のあるごとに
その家にあつまりゆき
うつくしき弔旗をもたせてもらひぬ。

小供の頃はなるべく長い弔旗を
あらそひてもち、その葬列の
先頭にあゆむをほこりとしたり。

青い竿にまきつける弔旗の

ぢつと心に垂れしも知らず。

かなしき鐘の音も
知らざる人のやうに
心の中を通らず。

人々のすゝり泣くをみて
たゞあやしげなる顔とおもひぬ。

小供の頃は葬列の長い行列を
樂隊めきしものにおもひて
ふとふざけたき事もありたり。

眠れる嬰兒

すや〳〵と眠れる嬰兒の
とぢし眼蓋をうかゞひながら、
しづかに搖籃のまはりをめぐる。

搖籃をすかし見れば
うごかぬ白き眼蓋、
しづかに嬰兒は眠り居れり。

しづかに、されど草や木のやうに

はた、動物のやうにふとり居れり。
顳顬（こめかみ）のあたりより髪の中へ
はひいりて消えし太き脈、
そのなかを命が通る。

搖籃のそとへいだしたる手は
匂へる光とぬくもりを握りしめ、
くちびるは乳房をおもひ出して夢にうごく。

それをうかゞひながら搖籃をめぐれば
心のふとあまへるやうに
眠れる嬰兒はにつこりほゝゑむ。

○

眠れる嬰兒をのぞき見ながら
搖籃のまはりをめぐれば
子をそだて居る獸のごとし。

子をそだて居る獸のごとき
心をいだきて搖籃のまはりを
しづかにめぐれば悲しくなれり。

淋しき野の如きものなり

それが何んであらうとも
影のやうなものであらうとも
いつ迄もはなされず。

それをぢつと握りて
次第につよく握りしめて
命が通る。

わたしはさびしき野のごときものなり、

あをざめし月光のふるへが傳はりて
おびえる心をもつ。

うすぐらき樫の葉の繁りにとまりて
小鳥が黒き眼をかたくとぢ
何事か切りに考ふ。

それによく似し心となりて
いつまでもはなされぬ生の幻、
かゞやける命の影。

いかにつまらぬものであらうとも

てのひらにぢつと握りしめて
はなされぬ生の影。

わたしはあをざめし野の如きものなり、
夜となればさびしき心を抱き
たゞひとり茫漠として生く。

春の夜

わたしはぢつと窓にもたれて
蝶のうまるゝ
なまあたゝかさを知る。

心の上にうつれる
うすぐらき花ぐもり、
それがこそばゆき夜となれば、

かゞやける露より露へ

白きかげを引きて
匂へるゆふべとなれば、

たへられぬさびしき夜となれば、
なまあたゝかさのふわ〳〵と寄りくる
心のほとりに、

わたしのくらき心のほとりに、
蝶のうまるゝけはひが
ひし〳〵とせまりきたる——

わたしはぢつと眠つてゐても

その蝶のうまるゝ
なまあたゝかさに終夜うなさる。

花の亡靈

いづくよりきたりしか知らねごも
ふとうかびいでし赤き花の亡靈が
わたしのまへをふわり〳〵往來す。

わたしの心を追ひきたりて
なよ〳〵ともたれ掛る、
その花の亡靈は何のかたちも無し。
くらき影より影へつたはるそよ風が

路をうしなひて邊(あた)りへまぎれゆけば
赤き花の亡靈は身をふるはす。

赤きダリヤは夢のなかに織りこまれ、
かゞやける透影を外へ洩らす、
日はねぶたげなる光を廣々と敷く。

わたしの心は花にうなさる、
邪淫の氣ひし〳〵と迫りきたりて
くるしさに口を太くあけて呻く。

わたしが深き晝室へ逃げかへれば

あをざめし窓掛けを手の如きものにて
しづかにおしひらきて忍び入る。

わたしはいつも頭をかゝへて眠らず、
その赤き花の亡靈が夜も晝も
わたしの心の上に止まらんと追ひきたる。

啼かぬ小鳥

わたしの歸りがおそい故か、
それともわたしの留守に啼きあいたのか、
もう啼かぬ籠の小鳥。

うすぐらい籠のなかに、
こゝろ細げにとまつた小鳥。

部屋に入つてともし火をつくれば
おどろかされてわたしの方へ見向いた小鳥。

ぢつとわたしを見つめてゐたが
またもすぐ眠らうとうつらうつら、
もう啼かぬ籠の小鳥。

小鳥はねむたさにうつらうつら、
その啼かぬ鳥の心を訪ねんと
籠のなかをのぞく。

心細げにとまり木の上に
ぢつと眠つた籠の小鳥、
もう啼かぬ沈默の時がきたれり。

可愛いその眼をとづる時がきたれり、
夜の沈默と死とがきたれり、
そしてもう啼かぬ小鳥。

籠の小鳥とわたしと——
うすぐらいともし火のかげに
もうふかき夜が來れり。

第二の心

心が
雷管のごとく破裂せんとす——
たえず汽車のごとき物が通りて
うすぐらき地平線の向ふへ超ゆ。
心のあゆみし太き足跡が
いつまでも草原にうつれり。

太き命をにぎりて
ギイと押す銀の扉。
そのおくに待てる第二の心が
こなたへ向く。

小鳥と赤き夕日

それはゆふ日が赤く照れる時。
ほふ、ほふと小鳥の群れを追ひしに
わが方をふりかへり見て
逃げさりし鳥がありたり。
その鳥のかなしげなる顔——
ほふ、ほふと追ひし聲が
風の音のごとくきこえたりしや。

それは夕日が赤く照れる時。
それからまた逃げし小鳥を
よび來りて木にとまらせ
ぢつと眺めてゐたくなりたり——
鳥は風とおもひて逃げしやも知れず。

路上所感

見もしらぬ外國へ行きたくなりて
金を貯める男の
あをざめし顏。

何となく氣うとき心——
ふとゆきずりに
しば〳〵出會ふことある心。
それは皆疲れて居れどもいそがはしげに歩める
かなしき人々。

たがひに知らぬ人々以上の
かなしきおもひを運べる
氣うとき心——

何となく氣うとくなりて
たゞ獨り金を貯めんとおもへり。

夏の宵

赤い提灯が河岸の家の二階の窓から
川のうへにおりゆきて水にうかべり。

青い水のうすぐらき川のおもてに
何をするにや提灯のかげが來れり。

流るゝ水のうへにぢつと止まりて
赤く燃ゆる提灯のあかりが薫る。

流るゝ水の心をすひとりて
赤い光が次第にふくれつゝ。

流るゝ水のつぶやきを聞きにゆきしか
河岸の家の提灯が水にうかべり。

何をするにや水のうへに
提灯の火はぢつと止まれり。

暗き室の入口にて

くらき室へ入らんと火をすりし時、
たゞ一本の燐寸の消えたるかなしさ。

燐寸の火のシュウと燃えて消えし
白きすり殻の指先きに殘れるかなしさ。

室はくらし、その入口にたゝずみて
指にもてる燐寸の白き殻のかなしさ。

夜もおそければ眠らんと歸りし心の
たゞ一本の燐寸の火の消えたる室の前。

室へは入らず、またもくらき心を抱きて、
賑へる町へ酒飲みに行くそのかなしさ。

夜の白樺

白樺の木かげにほそ長き草が一株、
その草の葉はねむられず、欠伸をなす。

月光の流れよる白き夜なり〳〵
草の葉はねむられず、太息を洩らす。

月光にかゞやく白樺の心は
草の葉にあやしき影をうつせり。

かゞやく心にそよ風のわたりきたりて
こぼれおつる白樺の甘き夢。

夜は白し、木かげの青き草の葉に
心のかげをうつして眠る白樺。

夜は白し、木かげの青き草の葉は
何故かねむられず、欠伸をなす。

眠の底へ

青いフラスコをさかさまに——
ながるゝ悲しきしづくの
心の上にこぼるゝ音。

はかない最後のひとしづくを
ぢつと見つめて
うつらうつら。

身體(からだ)を何かすべるやうに

氣だるさが
ふわりふわり。

つぎから次ぎへ
影のやうにつらなりて
くらき向ふへ。

たましひも
うつらうつら
深い底へ。

たゞ青いフラスコがいつ迄も

看視者のやうにたゝずむ。

日傘

河岸をとほれば赤い日傘の
影をすひとる水の面、
水はバツとあかりて匂へり。

河岸をとほれば赤い日傘が
ふわり〳〵と浮びて
水はバツとあかりて匂へり。

河岸をとほれば赤い日傘の

それとも氣づかぬ水のうへの影。

どこからかおちつかぬ心が
水のうへに來りてうかべり。

河岸をとほれば下へ下へ
日傘と心がながれて行く。

止れる時計

ひろき室の柱時計はとまれり、
その針はくらき影をさして止まれり。

長き針と短き針とが
かさなりし儘動かず。

うごかざる時計のガラスに
青ざめし窓掛けの色がうつれり。

何となくわが心の色に
よく似たる色がうつれり。

時計の針はうごかず、
わが心をさしてとまれり。

銀の煙管

よい口のやゝ黒くなりし銀の煙管(きせる)、
あまり光らぬ銀の煙管。

銀の煙管はつまりて
息も通らず。

煙草の煙も來らねば
わが心のつまりし銀の煙管。

長き路

いそげる要事あり、
死の知らせあり、
長き路をかけりて行く。

まつすぐい路は遙かあなたの
地平に入れど尚その向ふに
見えぬ影とありて續けり。

地平の向ふに知らせに行く

死のしらせ、
鉛のやうな重き心となれり。

その重き心を抱きて
たゞ急ぐ使ひの長き路。

路はつきず、知らせを急ぎて
心は横を見る間もなく
まつすぐに、地平の方へ。

まつすぐに地平の方へ
その路もその心も

いつまでも盡きず、たゞ急ぐ。

蠅の木伊乃

あをき芝生の上に
蠅の木伊乃が一つ。

お婆さんは今日も芝生に出で
もや〳〵しきそのぬくもりに
老いたる心をとろめかす。

芝生の上にぽつり〳〵散り敷く
お婆さんのふるきおもひではかいやけり。

あをき芝生の甘い薫りを
老いたる心がすひて
身躰（からだ）の所々にねむたさを催す。

お婆さんはいつしか眠れり、
ふとものにおごろきし鷓鴣（しゃこ）のやうに
その脊をくるんと曲げて眠れり。

青き芝生の上には
蠅の木伊乃が一つ。

芝生の上をわたるそよ風に
あちらこちら吹きおくらるゝ
かろき蠅の木伊乃。

お婆さんはしづかに眠れり、
すや〳〵としづかに眠れり。

○

あをき芝生の上をわたるそよ風に
あちらこちら吹きおくらるゝ
黒き蠅の木伊乃。

乾燥せる輕き木伊乃は
ふとおもひ出せしやうに
ふきおこる風に浮びて。

木伊乃はかつてその中にありし
おのが心のゆくへを
あちらこちらたづぬるやうに。

またともすればあをき芝生の上に
ぢつと止まりてうごかず、
たゞ風のまに〳〵黒き木伊乃。

ピストルの口

彈丸のこまりしピストル、
ピカ〳〵と光るピストル。

ピストルの口をそつと覗き見る、
そのうすぐらき銃身の奥に
何ものか出できたらんとするけはひあり。

眠れるピストルのくらき奥所(おくが)に
とがりし彈丸がぢつとひそみて

わたしの心をねらひ居れり、

その口はいつも開けり、
ねむれる彈丸の眼をさまさぬやうに
しづかに以前のサックに入れよ。

いら〳〵しきさまよへる心を
獵師のごとく追ひきたらんとす——
ピストルをサックに入れよ。

その彈丸の出られぬやうに封せよ、
銃身が息をすひこみて

もの〳〵しく光り居れり。

どんなおそろしき音をいだすやも知れず、
またどんな運命が出てきたるやも知れず。

おそろしき眠れるピストル、
その口はいつもひらきて
ぢつとわたしの心をねらひ居れり。

雨の夕

ふりそゝぐ雨の白きしづくを
欝せる心が吸取紙のやうに吸ふ。

机の上の飾時計はいつの間にかとまりて
金色の針がこわばりし指のごとく
くらき窓をさせる儘うごかず。

そのくらき窓より檻の繁りをのぞき見れば
私の心によく似し小鳥がふるへながら
雨を避けてふかき葉がくれにひそめり。

花瓶の白き百合はいつの間にか
窓の方へ花冠を向きかふ、
その白々しき心をぢつと眺め居り。

前へもすゝまず、後へも退かず
地面にひしとしがみつける心。
その心にふりそゝぐ雨の憂愁、
雨は次第に肋膜炎の水のごとく
たまりて尚もふりそゝぐ。

橋の欄干

橋の欄干(てすり)のくらき心に
さまざまの人が映りて通る。

ゆきかふ人のさまざまの手の
さまざまのぬくもりが觸れて行く。

橋の欄干(てすり)にさまざまの人の心の
ふれて行く長きひと日。

されどそのひと日が暮(くる)れば
橋の欄干(てすり)はまたくらき思ひに厩(うな)さる。

まだ見ぬ夢

まだ見ぬ夢のちかづき來るけはひに
うすぐらき臥せる心がおきあがりて
茫漠たる青き野の方へ向き直る。

きら〳〵とかゞやく白き光にてらされて
まだ見ぬ夢のあはき透影が
ベールをかぶりし女の顏のごとく見ゆ。

いづくよりきたりし光かしらねども

まだ見ぬ夢を彩(いろど)りて心の上に
貨物を載せし汽車のごとく運びきたる。

のびあがりうごく心の底に
まだ見ぬ夢の薫りがしみわたれば、
その夢をしつかと抱きて離(はな)さず。

死せる眞珠

死せる眞珠の
うすぐらき色
光のうせし星のやうな——

その死せる眞珠の
光は海へ逃げて歸り來らず。

指輪は尙さして居れども
わかれし後(のち)の心の

女の歌

くらい眞珠。

たゞ獨り、たへがたきさびしさに
つめたくなりし手を
甲虫(かぶとむし)の角(つの)のやうに振りうごかし、
またそつと指輪を唇(くち)にすひて
死せる眞珠の
くらい死骸にすゝり泣く。

○

眞珠のひかりは海へかへれり、

あなたと別れて姿が見えずなりし時
眞珠のひかりは指輪から抜け出でゝ、
眞珠のひかりは海へかへれり、
あなたと別れし後の
わたしその物に似し此の指輪。

つめたくなりてさゝり居れごも
指輪はくらし、
眞珠は暗し。

ふたゝび明るくなることも思へぬ

くらい眞珠、
眞珠のひかりは海へかへれり。

お照

はしやいだ心が
カッ〳〵と逆上せてしまへば
何もわからず。

何もわからずなつてゐたれど
それも暫し、またくらき心に歸りて
さめ〴〵と泣き出す。

藝妓となりてもう六七年——

さま〴〵のかなしきおもひ出が
しまりのぬけた心に集まる。

お照は泣いた「あゝいやだ」と
いくたびも洩らす溜息、
赤い懈怠に心がくる〳〵廻る。

やる瀬なき今のわが心を
われとかばうてゐるのも物うく
たゞひとり泣いてまぎらす。

もう泣きあきてカラッとなれば

次第にあざける心、
お照はまたもはしやぎはじむ。

お座敷へ

白い乳房のぬくもりの
もや〳〵しき懐に
しのばせし鏡をとり出す。

鏡のあをきおもてに
うかべる麝香の香、
あかりへ向いてプンと匂ふ。

うつれる白い顔の
きりつと引きしまる紅の赤さ、
それを吸へば心もついてゆく。

うつとり見とれてにこ〳〵頬笑む、
こぼれた光を圓めて
あまへる頬の靨

急にはしやいで、お座敷へ
いそぐ心の足も輕く
トン〳〵と二階へ上る。

銀の鈴と赤い夢

（上）

おまへが手をさし延す——
好い薫のある手が
わたしの心をにぎりに來る。

白い手が心のありかを探す、
枕屏風のけだるい光が
音もなくながれ掛る。

枕にまきついたおまへの
髪の毛が震へつゝ
わたしの身體を吸ふ。

赤い夢もまた身體を吸ふ。

（中）

裾につけた銀の鈴が
そのなかに心が入つて
あるく毎に鳴る。

おまへが來る、

心の鈴が來る、
銀の音が來る。

銀の鈴をつないだおまへの
赤い裾の
ところけるやうな色の噴出。

その色の方へ
わたしの心が向き直る、
まつすぐに起き上る。

心は鈴をつけてゐる。

（下）

さあ行かう、夜の散歩に
かゞやける心と心が
おなじ方へ。

おまへの褄の金の刺繍を
町の燈がふるへながら照らす、
こぼれた光が白い足を捲く。

あるく毎に鳴る

鈴の音、
心の音。

わたしの肩の上に
いつまでもはなれぬ白い手が
心をにぎりて赤い町へ散歩に行く。

死せる卵

わたしの心によく似し死せる卵、
おまへの心にもよく似し死せる卵が
二人の戀のかなしみをあらはしゐたり。

恰度あの雛鳥がすだちの朝、
母鷄はくく〳〵と巢のなかより
八九羽ばかりの雛を誘り顔につれていでたり。

その時くらき巢のなかに卵が一つ

ぽつちりと殘り居りしをおまへがとり出(いだ)して
「まあどうしたのでせう」とわたしの手に渡せし時。
おまへも見てゐたればおぼえて居るべし——
その青味がゝりしつめたき卵を
わたしが日のひかりにすかし見し時。

その死せる卵のなかには
うまれ得ざりし心が眠りゐたり、
おそろしき運命がぢつとひそみ居りたり——
卵はいとやすらかに眠りゐたれども

うまれずに死にたるおそろしきたましひが
日のひかりにうすくかげりて見えたり。

ふたりの心によく似し卵、
おまへが嫁ぎわたしがめとりし後の
かなしきおもひでによく似し卵。

「まあどうしたのでせう」と言ひし
おまへのおどろきが二人の身にもきたりて
死せる卵はかなしき戀をあらはし居たり。

水の上

池のまはりの心と心が
ふと、ゆきあひて水にうつれり。

水の上にてあへる心は
かさなりて池をめぐる。

おなじベンチの上に
池を眺むる身體（からだ）が二つ——

二つあれども水のうへには
心と心が一つとなりてうつれり。

失せたる櫛

海よりのかへるさ、
くらい砂丘のうへに
おとせし櫛のわからぬはかなさ。

砂丘の上に、いとほのかに
髪の薫をこゞめて居れごも
櫛のゆくへはわからず。

あをき蒔繪のふとき櫛なれば
いづくにか光りてあらめごわからず。

何もわからぬくらい砂丘の上を
しづかにたづぬる心、
手さぐりに探すあやうき心に
ふと、くづれくる白き砂の響き。

すかし見ればその先きの
つまりしやうな暗さ。

砂丘の上と心の上に
星も出でぬくらき夜がかぶさりて

シーンと鳴るかなしき櫛の行衛。
櫛のゆくへは遂にわからず、
むなしき心をおさめて歸る。

抜毛の束

ひと束のかなしき抜毛、
ひと束の死せる髪の毛。

置屋の春の二階に
縁側のもや〳〵しきぬくもりに
身體（からだ）のどこか知らぬねむたさに。

ひと束のかなしき抜毛、
ひと束の死せる髪の毛。

あゝ旅藝者、その長きつらきつとめの
さまざまのおもひでに耽れば
次第におちてゆく暗い底。

おちてゆく心を
さゝふるものも無きたより無さ、
次第に果敢なき生ぞ増す。

あの夜なりき、うすくらい星影に
白く光りしモルヒネ、
されど遂に情死未遂の今の此の姿。

男といふ異様な心の
ぬくもりも厭や、
赤い酒にとろめく歓楽も——

そしてわがこの心より、身體より
女の薫も、色も形をも
何ものかうばひ去る抜け毛の束。

ひと束のかなしき抜毛、
ひと束の死せる髪の毛。

それをぢつと手に握りて
震へるくらい心の底から
人知れぬ太息(といき)をいく度もつく。

姉

故郷をおもふ、離縁されてかへりし
くらい顔の姉がひとり
今夜もぢつと眠つてゐるなり——

はげし朱色の簞笥のまへに
さびた金具の方を向いて、
さびた金具のやうな心の
姉がひとり、せまい部屋(へや)に。

暗き背景

そんなに心もとなくおもふなら
お前のその白い手を
わたしの心に届くまでさしのばせ。

そんなにすねず、雨の音をきけ——
かゝる夜は見知らぬ林に
まよひ入りし小鳥が死にて
梢からぽつんとおちる時なり。

あかりを太くしてわたしの方へ向け、
ぬれたるくらき空より
わたしの心へつたはる太息(いき)あり。

青ざめし壁の方へのみ
そんなに躙りよればお前が
ぴつたりすはれて消ゆ。

そんなにすねず、平らかな心に
雨の音をきけ、
雨は見えざる深き影にふりそゝぐ。

かうしてつひに別れるやうに
ぽつちりしたお前と私、
わたしの心に重き鉛が這ふ。

ほゝゑみ

すひつけ煙草の
唇に匂ふ
赤き味。

火鉢の向ふここちらに
おなじ太息をもらす
心と心。

その太息をちつとおさへつけて

夜を待てる
すひつけ煙草。

すひつけ煙草の赤い味に、
そしらぬ風をして
心がむき直る。

むく〳〵とおきた思ひを
たがひに言ひかねてまぎらす
夜のすひつけ煙草。

或る夜

青ざめし壁を見つめてゐたるに
そのとき來りし白い顔の女を
ふと、打ち殺したくなれり。

おそろしきその心をこらへて
女の白い顔を見つめてゐたるに
自分がさきに死にたくなれり。

紅色の花の一片

おまへのながい手紙の中に
まきこみありし紅色の花の一片。

遠くはなれし心を見せんと
ながい手紙につゝみておくりし
紅色の花の一片。

お前の帯の色に似たる
紅色の花の一片。

その色は長く封ぜられし間に
遠き旅路をつゞくる間に
おまへの心ここととなる色に——

遠くはなれしかなしさよりも
かはれるその色のかなしさ。

その色はもとにかへらず、
私の心は褪げたる思ひす。

家出

何もいはずに置いてください、
磯巾着の延々とふくれるやうに
次第に太くなるわたしを眺めてゐてください。

わたしの身體が次第に太くなる、
居るべき所に居られぬ程
次第に太くなる。

小さい蕾のふくれるやうに

そして心が花と開く。
中のちからがはげしく匂ふ。

わたしはすべてのものを包む、
シユッ〳〵と汽車のやうに
心が前へ走つてゆく。

何も言はずに置いてください、
わたしを引きよせる強いちからが
くらい木立の向ふにひそむ。

わたしはすべてのものを抱きしめる、

あなたを抱いて満足さした手が、
木立のなかにひそめる暴風(あらし)を抱く。

心がシユッ〳〵と走つてゆく、
いだかうとする手が彎(かぎ)のやうに
彎曲しそしてふるへながら、

力と力が感じあうてゐる、
あなたを抱いた心が
シユッ〳〵と走つてゆく。

病める日

二十五まではおもひいだせども、
それよりさきは名も顔も覺えず。

おぼえぬ故にかなしくはなけれども、
かゝる多數の女をおもひ起すが悲し。

つひに名もわからぬ女よ、
その女のいかにうつくしかりしか
それを戀しとはおもはず。

消えさりしおもかげはともあれ、
順々におもひ出す多くの女、
心がはかなき踴躍(ゆうやく)を覺ゆ。

二十五人まで、そのおもかげが
心の傍を群集のごとく往き來す。

多くの女をけがせし誇りが
黄色い病める日のかげに透く。

暗き木立へ

（上）

赤きひかりの尾を引きて
しづかに拔けいづるたましひ——

たゝずめる黒き木立をとりまく
あをざめし廣き野へ
歡樂のかなしき死屍を運ぶたましひ

そよ風にゆるゝ月の光の綾、

絶え入る息の一握りの白きかげ。

いそがるゝ心の
いそがるゝ鈍き歩み。

歡樂にあけるたましひは
女の手よりわれをとりもどし
赤き三階をおり來りて、

さし入るあをき月の光を吸ひ
木立の中へしのびゆく次ぎの刹那——
わが前に横るくらき刹那。

首縊らんとふるへながら急ぐ
自殺者のつかれし溜息は
地におちて彎曲し、すゝり泣く。

歡樂よ、さやうなら。

（中）

われはありやと問へども。
われは答へずすゝり泣く。

あをき濕りは

ちく〳〵と刺して溶解す、
從順なおち葉のくらき重(かさな)り。

うごかぬくらき梢を
はかなき眼にてあふぎ見ながら
かなしげにすゝり泣く。

われはありやと又も問へば
やうやくに無しと答へる聲。

のろき歩みの路の行手は
つめたき木立の底に臥せる

縊死のくらき影と連續し、

あをざめし月の光を敷ける
ひろき野にわれの影れる痕跡(あと)。

たましひの塊は裂けて
とび散れど何の音もなし。

（下）

そして今、木立のくらき底へ
あゆみ入る自殺者の
白紙に似たるわれの影。

歡樂よ、さやうなら、
女よ、さやうなら。

つかれたる重きたましひを
ゆきたがる所へやりて
世とはなれてゆくすべての物の淡さ。

たゞ祈る、死後の顔の
よろこびもかなしみも無き
わがくらき顔の木立に殘らんことを。

著作權所有
不許複製

大正三年三月二十日印刷
大正三年三月二十三日發行

著者　加藤壽太郎　東京市牛込區原町十四番地
發行者　尾後家省一　東京市京橋區弓町十三番地
印刷者　柴田杠一郎　東京市京橋區弓町十三番地
印刷所　千代田印刷株式會社

定價　小包送料　金八錢
金十八錢

發行所　東京・牛込・神樂坂上　南北社
電話番町三八〇四
振替東京一九四

法學博士
浮田和民先生著

新道德論

時事新報評——世の進歩に伴ひて個人對個人、又は社會對社會の軋轢彌々其の度を加へ、殊に物質的文明の最も進歩發達せる所に於て道德上の疑惑を生ずること益々甚し。而も是れ實に一國民の據つて起つべき唯一の綱條にして、是れなくんば世道の歸趨紛々として殆ど瓦崩潰滅に瀕せざらんとするも得べからざらんなり。現代は即ち其の時なり。曰く道德は國家の保護を受くべきものか、道德と宗教との關係は如何、道德は藝術と調和すべからざるものか、目下に其の論結と研究を待つべき問題は識者先覺の面前に向つて雨の如く殺到するものあるべし。浮田博士は學東西に亘り識學界の權威たり。茲に平日の蘊蓄を傾倒して一々此等の難問に明快なる解決を與へ、在來の舊習を超越して別に一道の新道德を樹つ。立論堂々理路整々として、徹頭徹尾聽くべく味ふべき近來の快著である。自分自身の教養に努力する青年、又他の子弟の教育に身を委ぬる教育家は是非一讀せなければなるまい。

四六判約三百六十頁
箱入裝幀頗美本
定價金壹圓
小包送料八錢

忽五版

南洋王　江川薫先生著

南洋を目的に

北米の鎖門に執着する勿れ。南米の鵬程遠きを歎ずる勿れ。勃々たる發展の雄圖を懷きながら、曠しく猫額の天地に跼蹐し蝸牛角上錙銖の利を爭ふを休めよ。眼を揚げて南海を望め。豐饒無盡の天與の處女地は勇敢なる開拓者の來住を待てるにあらずや。パナマ運河の開通と共に歐洲の勢力は漸く東海に移らんとす。今にして這個の寶庫に發展して一大躍躍を行はざらんには、採るに任かせたる南洋天來の遺利は遠からずして外人の獨占する所とならん。行け南洋へ。森林も山野も河海も徒に豐富無比の天惠を懷いて漁業家栽培家採礦家の到るを待てり。南へ！南へ！方今此の聲頻りに高し。本書は久しく南洋諸島にありて一擧手一投足にして南海の利源忽ちにして其の有たるべきを觀たる著者が、六千萬の同胞の爲めに未聞未墾太古の儘なる新天地を紹介したるもの。天下圖南の士に取りて唯一絕好の南洋案内たるを信ず。

四六判約三百頁
洋裝極美本
定價金壹圓
小包送料八錢

忽三版

忽三版

茅原華山先生著

第三帝國論

所謂第三帝國とは新に創造建設せられんとする來るべき日本なり。明治維新までの舊綜せる覇者の帝國及び内容空虚なる明治の帝國に對して、第三帝國は充實せる國民個個の内的生活を基調とせる新日本なり。乃ち先づ物質に出立し肉に出立し、自我に出立し、個性を中心とし個性を標榜として、新家庭生活、新社會生活、新寧國主義、新勤王主義、新地方自治、新立憲政治、新國權主義、新帝國主義、新人間主義の實現すべき時代なり。本書は即ち論壇の巨人華山先生が、内的にも外的にも貧弱憐むに勝へたる現勢の下に徒らに偸安に耽れる邦人に向つて、隣邦支那を論じ、滿洲朝鮮を論じ臺灣樺太を論じ、大日本主義を論じ、外部的歴史的國家の打破を論じ、最大危險思想を論じ、生活即政治を論じたる警醒的撼天の獅子哮吼なり。今や藝術上政治上あらゆる意味に於て第三帝國建設の大任を擔へる滿天下の青年國民が須らく傾聽すべき大創見大卓論なり。

四六判紙數約三百二十頁
箱入總布裝極美本
定價金壹圓
小包送料金八錢

再版

「建築ト裝飾」臨時擴大號

埃及藝術號

埃及は世界の藝術的寶庫である。數千年後の今日に於て、一塊の木片、一片の瓦石にも尚ほ貴重なる藝術の生命は脈搏ち、美術家建築家工藝家文學家は固より一般人々が憧憬の藝苑、渇仰の殿堂とされて居る。本號は此の偉大なる埃及を紹介する爲に眞摯なる藝術的用意を以て編まれ、三色版コロタイプ版寫眞版等挿畫實に百數十、一つとして天下の珍ならざるはない。一度本號を繙かば身親しく古代藝術の淵叢に入りたるが如く、徂徠去るに忍びざるの感があらう。

專門大家執筆
四六倍判洋裝優雅
定價八拾錢
郵稅六錢

最新刊

「建築ト裝飾」社編

埃及藝術圖解

世界的寶物たる埃及の藝術を紹介したい目的から眞摯なる藝術的用意を以て編まれた珍重なる「埃及藝術號」は未曾有の歡迎を受けて忽ち再版を發行した。然ろに其の後眞に埃及藝術を味ひ之を研究せんとする人々から更に多くの實例發行の要求が頻々としてて申込まれた。此の盛なる要求に應じて發行するのが此の圖解四輯である。毎輯三色版三葉コロタイプ二十二葉を以て成り、埃及の繪畫、彫刻、建築、工藝等總ての方面に亘つて代表的傑作を網羅した。蓋し古代埃及の藝術の完全なる全集は此の圖解を措いて他にない。

第一輯—第四輯全百葉
四六倍判西上質紙
各輯頗美麗帙入
定價毎輯六拾五錢

建築ト裝飾特別號　セセッション號

増訂三版

セセッションとは何ぞや。セセッションの流行は今や絶頂に達し建築や家具は勿論、衣類の模様、ショールの意匠、髪飾り、下駄の鼻緒に至るまで一から十までセセッション式でなければ夜の明けぬ國とならんとして居る。然らばセセッションとは抑も何であるか、これはもと建築の一樣式の名であつて建築の樣式から延いて一般流行界に及んだもので殊に我國では一般國民の好みに合つて居る爲にセセッション式は最も短日月の間に廣まるに至つた。本書は建築界及び美術界の大家十餘名が丁寧に之を説明し加ふるに五十餘個の圖面を以てしてある。本書は實にセセッションを我國に紹介した最初の出版物であつて現在に於ても又本書の外に之を説明したものは全くないのである。工藝家、美術家、文學家は勿論苟くも世界の新智識――否我國の最新流行を知らんとする者は必ず之を一讀しなければならぬ。

口繪挿圖五拾餘面入
專門大家拾餘名執筆
定價金參拾錢
郵送料金四錢

最新刊

『建築ト裝飾』特別號

鐵筋混凝土（テッキンコンクリート）

極上質紙約九十頁
挿畫約八十個
裝釘極堅牢高雅
定價金七拾錢
小包送料金八錢

新らしき酒は古き革嚢に盛るべからず。今や科學は思想を刺戟し、思想は更に科學の徹底を求め、兩々相俟つて永久の眞に向つて進まんとす。我が建築界は正に思想と科學と生活との渾成たる現代藝術の象徴ならずや。其の思想界より齎らされたる新運動としては嚮にセセッション號及び埃及藝術號を刊行したり。今茲に現代科學が其の最高の威嚴を以て我が建築界に齎らしたる鐵筋混凝土が、新しき思想を盛るべき新しき革嚢として、如何ほどの量と自由とを與ふべきかを見んとす。顧みて、木と石と煉瓦に限られたる何千年の歴史は憐れにも微小なるかな。徒らにこの偉大なる新材料に驚嘆する勿れ。直ちに來つて如何にこの新しき材料を取扱ふきかを學べ。

菱沼哲之介先生著

日蓮宗高僧傳

菊判約三百三十頁
洋裝頗美本
定價金八十錢
小包送料八錢

大好評

幾度か兵火に包圍せられ、幾度か白刃の下を潜り、幾度か孤島に流され、凡ゆる苦難に遭ひながら、妙法華教弘布の爲めに七字の題目を眞甲に振り翳して奮戰苦闘したる宗祖日蓮の大法戰の一生を傳へたる書籍の刊行は既に汗牛充棟も啻ならず。されど或は其の法門弘通の勇猛戰に加はり、或は高祖の滅後法華弘通の道に從へる威德並び高き法弟の傳記に至つては絶無といふも過言にあらず。本書は即ち著者が宗門景仰の一念を以て、先づ高祖傳をものし、之に加ふるに六老僧、十八中老、朗門の九鳳等、高祖の滅後よく法燈を繼ぎて今日の隆盛を來したる高僧の一生を叙し、更に日蓮宗名刹の沿革及び其の一代の名智の傳記を編み、諸刹の開山及び諸刹住職の傳記を添へたり。乃ち本書は日蓮宗高僧傳の完璧たるのみならず、同時に又一面に於て實に珍重なる宗門史たるを失はず。